

平成17年度

独立行政法人国立美術館
東京国立近代美術館フィルムセンター

実績報告書

目 次

フィルムセンターの概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	7
1. 収集・保管	7
(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況	7
(2) 保管の状況	10
(3) 修理の状況	12
2. 公衆への観覧	14
(1) 展覧会・企画上映等の状況	14
企画上映「生誕百年特集 映画監督 稲垣浩」	18
企画上映「生誕百年特集 映画監督 豊田四郎」	20
企画上映「発掘された映画たち2005」	22
企画上映「生誕百年特集 映画監督 成瀬巳喜男」	24
企画上映「生誕百年特集 映画監督 斎藤寅二郎と野村浩将」	26
特別企画上映「日韓友情年2005 韓国リアリズム映画の開拓者 兪賢穆監督特集」	28
特別企画上映「シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち」	30
企画上映「松竹創業110周年記念 松竹映画探索 1960-70年代」	32
企画上映・特別企画上映「日本におけるドイツ2005/2006 NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」	34
共催上映「ポーランド映画、昨日と今日」	36
共催上映「第6回東京フィルメックス 特集上映 生誕百年特集 映画監督 中川信夫 ~地獄のアルチザン~」	38
展覧会「展覧会 映画遺産」展(併設:「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展/「ポーランドの映画ポスター」展/「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展)	40
展覧会「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)	41
展覧会「ポーランドの映画ポスター」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)	43
展覧会「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)	45
特別展示「『浮雲』再現セット」	47
優秀映画鑑賞推進事業	48
(2) 貸与・特別観覧の状況	50
3. 調査研究	52
4. 教育普及	55
(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況	58
(1) - 2 広報活動の状況	59
(1) - 3 デジタル化の状況	61
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	62
(2) - 2 講演会等の事業	64
(3) - 1 研修の取組	67
(3) - 2 大学等との連携	68
(3) - 3 ボランティアの活用状況	69
(4) 渉外活動	70
5. その他の入館者サービス	71

フィルムセンターの概要

1. 目的

フィルムセンターは、昭和27年の近代美術館開館当初にフィルム・ライブラリーとして発足した。その文化的、芸術的、歴史的価値に鑑みて、映画についても美術館の対象領域と位置付けられたものである。

フィルムセンターは、同種の施設が皆無であることもあり、映画に関する総合的な歴史博物館として映画フィルムや映画の関連資料を可能なかぎり網羅的に収集、保管、公開し、我が国の映画文化全般にわたって中枢的な研究・普及機関としての役割を担っている。

発足した当時は、美術展に関連した美術映画を週1、2回程度上映するとともに、主に劇映画フィルムの収集を行っていた。昭和37年にフランスとの交換映画祭を開催したことを契機に、以後諸外国との交換映画祭が活発に開催されるようになり、上映活動も1日1回程度に拡充された。また、同時に諸外国で開催される映画祭での日本映画上映のためにフィルム収集が活発に行われるようになった。

その後、昭和42年から3年間、戦後GHQに接收された可燃性の日本映画の返還が行われ、これの不燃化作業が実施されることで、所蔵映画フィルムの充実が図られた。昭和44年の美術館の移転に伴い、昭和45年にはフィルム・ライブラリー業務の拡充と上映施設及び映画に関する展示室が整備されてフィルムセンターとして開館した。昭和61年に映画フィルム専用の保存施設が神奈川県相模原市に設置された。平成7年には旧施設の全面改築によって施設規模も拡充し、収集・保存・上映事業も充実して、今日に至っている。

2. 土地・建物

(1) フィルムセンター

建面積	727m ²
延べ面積	6,912m ²
展示面積	343m ²
収蔵庫面積	341m ²

(2) フィルムセンター相模原分館

建面積	1,311m ²
延べ面積	4,344m ²
保存庫面積	2,022m ²

3. 定員 11人

4. 予算 955,490,000円

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

実績

1. 業務の一元化

本部において、これまで行っている一元化に加え、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。

2. 省エネルギー等(リサイクル)

(1) 光熱水量

フィルムセンター

光熱水量(料)の節約・効率化は、毎年度推進している。平成17年度は、昨年度より季節の寒暖の差が緩やかだったため、空調設備への負荷が少なく電気量は減少したが、企画上映等の日数及び回数増加により、結果として、水道量が増加した。

ア.電気 使用量1,025,820kwh(昨年度比99.84%) 料金20,348,986円(昨年度比98.38%)

イ.水道 使用量4,083m³ (昨年度比112.35%) 料金2,364,833円(昨年度比114.20%)

相模原分館

電気量については、最大需要電力のピークを抑えることにより契約電力を下げ基本料金を減額し、電気量も減少したが、単価の上昇により料金が僅かに増額した。また、水道料も僅かに増加した。

ア.電気 使用量1,149,654kwh(昨年度比98.41%) 料金15,652,177円(昨年度比101.68%)

イ.水道 使用量160m³ (昨年度比101.26%) 料金30,035円(昨年度比101.81%)

(2) 廃棄物処理量

一般廃棄物量及び処理料が減少した要因は、節約努力により、新聞・雑誌・段ボールなどの別途に収集が必要となる廃棄物を減少させたことによる。

また、産業廃棄物量及び処理料が減少した要因は、昨年度より寄贈フィルム本数が減少したことに伴う、廃棄フィルム缶の減少によるものである。

フィルムセンター

ア.一般廃棄物11,700Kg(昨年度比 92.56%) 料金234,990円(昨年度比79.42%)

イ.産業廃棄物13,700Kg(昨年度比 66.92%) 料金364,117円(昨年度比70.11%)

相模原分館

ア.一般廃棄物 - Kg(昨年度比 - %) 料金 - 円(昨年度比 - %)

イ.産業廃棄物 2,670Kg(昨年度比 45.48%) 料金 167,674円(昨年度比 59.32%)

(3) その他 古紙の再利用、OA機器用のトナーカートリッジのリサイクルによる再生使用。

3. 施設の有効利用

(1) 小ホール

小ホールについて、フィルムセンターの事業に差し支えない範囲で外部への貸付けを行った。

小ホールの利用率 25.48% (93日/365日)

フィルムセンター事業 92日(企画上映等47日、特別映写観覧38日、国立新美術館設立準備室3日、その他4日)

外部への貸付け 10日(建物使用8日、文化庁2日)

重複日 9日

(2)会議室

フィルムセンターの事業に差し支えない範囲で外部への貸付けを行った。

会議室の利用率 49.59%(181日/365日)

フィルムセンター事業 174日(フィルムセンター27日、国立新美術館設立準備室147日)

外部への貸付け 29日(建物使用22日、文化庁7日)

重複日 22日

(3)相模原分館

相模原分館映写ホールの利用率 2.19%(8日/365日)

フィルムセンター事業 8日(小中学生向け上映会2日、特別映写観覧6日)

4. 外部委託

(1)清掃業務 (2)機械設備等維持及び運転管理業務

(3)受付、出札、警備等の会場管理業務 (4)小・大ホールの映写業務

(5)夜間及び休館日の機械警備業務 (6)その他、設備関係のメンテナンス業務

5. O A化

館内LANの整備状況

フィルムセンター事務室、映写室、図書室、収蔵庫等の館内LAN及び相模原分館とのデジタル専用回線を利用した通信を整備しており、職員へパソコンを各1台配置し、館内、相模原分館及び東京国立近代美術館本館等に電子メールによる事務連絡等を行った。

・紙の使用量 A4判 220,000枚(昨年度比 98.87%)

A3判 10,500枚(昨年度比 111.66%)

B4判 3,000枚(昨年度比 17.14%)

B5判 500枚(昨年度比 5.00%)

6. 一般競争入札

映画フィルムの購入契約は、著作権者との契約による購入となるため、競争入札では入手できない。

そのほかは東京国立近代美術館に含まれる。

7. 評議員会、外部評価委員会

(1)評議員会

開催回数 2回

議事内容

第1回:平成17年6月30日(木)

平成16年度事業実績報告、平成17年度事業実績経過報告(4月～6月)及び「安部コレクション」についての報告、意見交換。

第2回:平成18年3月2日(水)

平成17年度事業実績経過報告、FIAF「東京会議2007」及びフィルムセンター独立について経過報告、平成18年度事業実施計画について協議、意見交換。

8. その他

1階「映画の広場」に普及広報用の大型ディスプレイを設置した。

7階展示室の映像設備を改良更新した。

1階「映画の広場」に自動販売機(飲料)を設置した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

1階厨房スペースを改装することにより、2部屋の個室を設置し、会場管理控室内に設置していた救護スペースを独立した救護室として利用できるようにした。

空調設備の自動制御を監視する中央監視装置は、竣工後、約12年が経過したため、機器の信頼性の低下及び今

後の保守部品対応の不安要素をなくすために更新を行い、インターネット網を利用した遠隔監視サービス等にも対応させた。この更新により、自動制御機器の更新を随時実施出来る環境となり、長期的なビル管理の視点からランニングコストの削減になる。

また、消防訓練の実施により、消防用設備の使用方法等について、職員に周知した。

【見直し又は改善を要する点】

大ホールの温湿度の調整は、季節の変わり目に行う空調システムの冷暖切替を早めに実施したほか、稼働時間を毎日の天候にあわせて早めるなどホール内の環境の安定化を図っている。平成17年度は、より細密な温・湿度管理が要求されるピアノの伴奏付き特別企画上映に際し、手動操作による頻繁な空調設備の調整を行った。今後、より快適な環境を確保するために、設備の改修及び改善を視野に調査していく必要がある。

また、上映事業等の多様化に対応するため、観覧者の導線及び避難誘導等を円滑に行うための館内サインなどを全般的に見直していく必要がある。

相模原分館映写ホールについては、活用を図るための検討を継続していく必要がある。

【計画を達成するため障害となっている点】

経年劣化に対処していくために設備の更新等が必要となってくるが、設備機器が、屋上スペース又は地下3階の電気室などに密集して設置されているため、撤去・設置のコストがかさむほか、施工期間中の事業中断等が懸念される。

入館者数の増減、温暖化による気候変化の増大や原油高の影響等による料金改定などは、それを正確に把握することが困難である。

相模原分館ホールについては、活用を図るための検討を継続しているが、立地条件と限られた人員での運営とにより、外部との連携等の活用のための方策を見出すことが難しい状況である。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(東京国立近代美術館)

近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。美術・工芸に関してはコレクションにより近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。

また、映画フィルム等については、残存するフィルムを可能な限り収集するとともに積極的に復元を図る。

(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

方 針

フィルムセンターは、東京国立近代美術館の映画部門であるが、その収集方針については、芸術的評価を第一義とする選択的なアート・ミュージアム・ポリシーよりも、我が国唯一の国立映画機関として映画の歴史をまるごと集積させることを努力目標に掲げるアーカイバル・ポリシーを重視しており、機関設置以来、年代、製作国及びフォーマットなどを問わず、あらゆる映画フィルムを収集している。中でも、日本映画については、最優先で網羅的な収集を目指しているが、この方針は各国のナショナル・フィルム・アーカイブが自国映画遺産の安全保護と次世代への確実な継承に責任を負うべきだという国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の精神にも合致している。

また、映画というメディアの歴史的な性格を考慮し、化学的な経年劣化や劣悪な環境に置かれていたための分解・腐朽が懸念されるフィルム、廃棄・滅失等による散逸が懸念されるフィルムを優先して安全保護する一方、文化的、歴史的、美学的に重要なフィルム、国内外で残存が判明した作品も積極的に収集することとしている。

上映事業との関連では、とりわけ企画上映に必要なフィルム、国際交流に必要な作品などのプリント作成を優先的に行っている。

フィルムセンターには、ネガフィルムのみ収蔵している映画作品が数多くあるが、上映企画に合わせてそれらをポジフィルムに複製する必要がある。とりわけ平成17年度は「ドイツ・オーストリア映画名作選」のために多くのポジを作成した。

また、近年海外のフィルム・アーカイブや映画祭からフィルムセンターに対して日本映画フィルムの貸与依頼が増加しているため、平成17年度は英語字幕付の日本映画プリントを積極的に作成した。

映画関連資料については、日本で刊行された映画関連の図書、雑誌のほか、日本映画を中心に作品に関連する三大資料であるシナリオ、ポスター、スチル写真の網羅的な収集を目指している。その他、製作にまつわるものから配給興行に係る宣伝資料、技術資料まで多岐にわたる資料があり、国内に同種機関が少ないこともあって、映画会社、関連団体、コレクターから寄贈の希望が多く寄せられている。これらについても、可能な限り受入れを行い、資料の散逸を防ぐことを目指している。

実 績

1. 映画フィルム

購入等	476本
寄 贈	1,532本

2. 映画関連資料

寄 贈	2件	59,559点 (図書資料を除く)
-----	----	-------------------

3. 陳列品購入費	予算額347,146,000円	決算額362,464,276円
-----------	-----------------	-----------------

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成17年度は、各社からの購入、所蔵フィルムの不燃化や複製、寄贈等によって2,008本を新たに収蔵した。映画の種別として、日本劇映画、日本文化・記録映画、アニメーション映画、外国映画等、偏りなく着実に収蔵本数を増やすことが出来た。特に日本文化・記録映画について、昨年と同様1,000本を超える作品を収蔵した。

主に日本文化・記録映画の製作者に呼びかけている原版寄贈について、平成17年度は、株式会社徳間書店、株式会社日映科学映画製作所等の企業や団体からの寄贈手続きを完了した。大手映画製作会社からの劇映画の原版寄託については、平成17年度も寄託契約の更新を行うとともに、日本放送協会、有限会社天遊等の企業や団体、斎藤武子氏等個人から、可燃性原版を含む貴重な日本劇映画及び文化・記録映画の寄贈を受けた。また、FIAF加盟機関であるミュンヘン映画博物館との交換寄贈により、ドイツ映画『巨人ゴーレム』(1920)を収集した。

購入については、企画上映等のために、未収蔵であったポジプリント及びデューブネガを購入したほか、共催企画となったニューヨーク近代美術館及びポルデノーネ無声映画祭の日本映画特集、東京フィルメックスの中川信夫監督特集のために、英語字幕付フィルムの購入や所蔵フィルムの複製化を行った。また、プラネット映画資料図書館、株式会社日本映画新社、株式会社マツダ映画社等が所有する貴重な日本劇映画及び文化・記録映画の可燃性原版から、不燃化したデューブネガ及びポジプリントの購入を行った。

収蔵するネガフィルムから新たにポジフィルムを作成することも平成17年度の課題であり、111本の作品についてポジを作成し、収蔵した。特に企画上映「NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」のために、40本の上映用ポジを作成した。さらに、平成17年度にあらたに復元・上映を行った『キリストの一生』(1923)や『東洋の秘密』(1928)のフィルムは、フィルムセンターが収蔵するプリントが世界で唯一の(または最良の)素材であり、資料的価値の高いプリントである。

また、積極的な収集を目指した英語字幕付日本映画のプリントについては、22作品の所蔵フィルムに新たに英語字幕を付したほか、21作品の英語字幕付日本映画のポジを購入した。

映画関連資料については、故御園京平氏の旧蔵資料「みそのコレクション」59,210点(図書資料を含めると60,146点)の寄贈受入れを終えた。御園京平氏は国内有数の映画資料コレクターであり、とりわけポスター、写真、プログラム(劇場番組表)のコレクションは国内最大級とみなされている(ポスターの大部分は1995年に寄贈済み)。今回の寄贈では、戦前日本映画に関わるスチル写真、プロマイドのコレクションを充実させることができた。また、従来フィルムセンターが所蔵する戦前の常設館プログラムは数百点を数えるのみであったが、1万5千点以上にも及び資料を一括で受入れたことにより、コレクションの基礎を作ることができた。

【見直し又は改善を要する点】

平成17年度に受入れた映画フィルムの数は、長年にわたる手続きが完了した昨年度に比して購入等が482本減、寄贈が5,452本の減となったが、英語字幕付プリントを含む企画上映等のための購入及び不燃化、複製化は増加している。そのため、原版フィルムの所在確認と的確な発注計画のための調査、所蔵フィルムの状態確認等修理・復元と連動した作業、及び字幕監修の作業等には、これまで以上の時間と労力を要する。さらに、効率的な収納を行うためのフィルムのつなぎ替え等の仕様変更に伴う作業やフィルム編集機等の機材の保守、及びフィルムの出入庫や館内での移動を管理する作業については、効率的な態勢づくりが必要である。

映画関連資料については、大量寄贈手続きが完了したり、展示計画の拡充など公開事業に柔軟な対応ができた反面、新規寄贈資料の整理、手続きなどでは目立った成果を上げることができなかった。

なお、昨年度同様、平成17年度も映画機材など大型資料の寄贈が相次いでいるため、保管場所の確保について引き続き検討が必要である。

【計画を達成するために障害となっている点】

ここ数年の大量寄贈や寄託等により、平成17年度末までにフィルム保存庫の収納率はすでに60%を超えており、保存庫の増築についての議論が必要である。また、大手製作会社、独立系製作会社にかかわらず、今後とも原版の所在確認と収集を計画的に行うことが重要である。製作年が比較的新しい映画フィルムについては、興行との関係や、いわゆる「製作委員会」方式の増加によって、著作権者の確認や了解を得るための事務処理が複雑化していること等の理由により、購入できない場合が多く課題となっている。製作者以外が所有している映画フィルムについては、国内外の同種機関等との情報ネットワークをより緊密にする必要がある。

映画関連資料については、国内に専門機関が限られているため、フィルムセンターに寄せられる寄贈の件数、数量

も増加の一途をたどっているが、今後は受け入れ体制の強化が必要である。

平成17年度は現像所や字幕製作会社などの業務撤退が相次ぎ、それに伴って機材等の寄贈申し出が増加した。映画専門機関のみならず科学技術系資料館なども映画機械の収集には積極的でないため、フィルムセンターとしては受入れに可能な限り柔軟に対応したが、整理作業は今後の課題となっている。また、それらの保管場所確保も検討する必要がある。

* 添付資料

収集した映画フィルム件数の推移(事業実績統計表 p.1)

購入・寄贈映画フィルムの一覧(事業実績統計表 p.19)

(2) 保管の状況

中期計画

- (2)-1 国民共有の貴重な財産である文化財を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。
- (2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

(1) フィルムセンター

展覧会場

空調実施時間 9:30～21:30(ただし、土・日・月曜日は9:30～18:30)

温度 22 ± 2 (ただし、夏季は24 ± 2) 湿度 50% ± 5%

原則として設定された温・湿度で管理を行ったが、外気温度との差により入館者のために最高25 までを許容温度とした。

24時間空調が望ましいが、経費等を考慮して入館時間のみの運転時間とした。

収蔵庫

空調実施時間 10:00～20:00(ただし、土・日・月曜日は10:00～18:30)

温度 23 ± 2 湿度 55% ± 5%

収蔵庫は地下3階に位置し、庫内の出入りがない場合は殆ど温・湿度に変化が生じないため、設備管理要員がいる間のみの運転とした。

(2) 相模原分館

収蔵庫

空調実施時間 24時間

(地下1階保存庫) 温度 10 ± 2 湿度 40% ± 5%

(地下2階保存庫) 温度 5 ± 2 湿度 40% ± 5%

(特別保存庫) 温度 2 ± 2 湿度 35% ± 5%

2. 照明

フィルムセンター7階展示室内のポスター、スチル写真等は100ルクスを上限とするとともに入館者の有無を自動的に感知して照明の起動が行われるように設定し、作品への影響の低減化及び省エネルギー化を行った。

3. 空気汚染

空調熱源に関しては、全て電気で賄っているため、施設設備からの空気汚染は発生しなかった。

また、施設内については、「建築物の衛生的環境の確保に関する法律」に基づき空気環境測定を実施した。

4. 防災

(1) フィルムセンター収蔵庫の消火設備は二酸化炭素消火設備を設置。

(2) 相模原分館保存庫の消火設備はハロゲンガス消火設備を設置。

5. 防犯

(1) フィルムセンターは、各階毎の機械警備(昼夜)の導入により、防犯を実施。

(2) 相模原分館は、各棟毎に機械警備(昼夜)の導入により、防犯を実施。

6. 収蔵スペースの確保について

昨年度に、相模原分館に隣接する旧淵野辺キャンプの跡地の利用について、相模原市に対し要望を提出した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み

映画フィルムは化学的に脆弱なため、専用の保存庫を備えるフィルムセンター相模原分館において24時間、恒温恒湿の状態での保存している。具体的には、寄託映画フィルムを中心とした地下1階は室温10 ± 2、相対湿度40% ± 5%に設定し、原版フィルムを含む所蔵映画フィルムの収納庫がある地下2階は室温5 ± 2、湿度40% ± 5%に設定して保存している。また、アセテート・ベースのフィルムに顕著な劣化現象である「ビネガー・シンドローム」に侵されたフィルムについては、独立の空調設備を備え、室温2 ± 2、湿度35% ± 5%に設定された専用室において保存して

いるため、フィルム素材の所蔵品については、問題ないと考えている。

また、相模原分館からのフィルムの出入庫に関しては、外気温度との格差による結露等を防止するため、ならし室で所要日数(季節により、2～4日)を調整の上で搬出している。フィルムセンターと相模原分館との間のフィルム運送については、保存庫と同様に1缶ずつ収納できる棚を設けたキャスター付きの台車(1台当たり2,000フィート缶40缶収納)を、美術品専用車両で運搬している。

映画関連資料のうち、ポスターやスチル写真など主に紙資料は専用の収蔵庫で保管している(室温20℃、相対湿度50%)。また、スチル写真のガラス乾板(ネガ)については、昨年度、相模原分館のフィルム保存庫内の専用のスペースを確保して保管している。

【見直し又は改善を要する点】

素材が化学的に脆弱なフィルムは、定期的・集中的な保存調査が望ましいとされているが、ここ数年、新収蔵作品数の増加に伴う検査業務に追われ、恒常的、遡及的な保存調査の実施が困難な状況が続いている。引き続き、この点に関して体制整備を行っていく必要がある。

映画関連資料については、その大部分は、フィルムセンターにある温湿度の管理された専用の収蔵庫内で管理しているが、昨年度同様に新収蔵資料数の増加が著しいため、スペースの確保が問題となっている。また、撮影機や映写機などの技術資料は、相模原分館内の空きスペースに保管しているのが現状で、長期的保存のためには専用のスペースを確保することが必要である。

(3) 修理の状況

中期計画

- (3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。
緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。
伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。
- (3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

保存 / 復元の方針と内容

全ての映画フィルムを保存対象とするという基本方針の下でフィルムセンターは保存活動を実施しているが、近年、映画関係の業界でも、その認識が高まってきている。とりわけ近年はフィルムからデジタル媒体への急速な移行の中で、フィルム原版の保存とその保存活動を行うフィルムセンターの役割がますます重要となっている。できるだけオリジナルに近いフィルム素材を収集し、専門知識に基づいてその内容や物理的状態を調査し、適正な条件の下に保存するという一連の業務が映画保存の根幹だが、その次の段階として、損傷した素材から視聴可能な素材を作り出す作業(復元)にも積極的に取り組んでいる。フィルムセンター所蔵の可燃性フィルムを不燃化した例は93本であり、その中には日本の劇映画、記録映画などのほか、戦前に日本で公開され、本国では既に失われている世界的にも貴重なドイツ映画が数多く含まれている。また、これまで3年にわたり映画フィルムのデジタル復元に取り組んできたが、平成17年度は新たな試みとして映画音声のデジタル復元に本格的に着手した。音をデジタル化し、様々なソフトウェアを用いてノイズ除去などの処理を行い、再びフィルムに焼付けるものであり、49本について実施した。1930年代に作られた9.5mmや16mmのフィルムと、それに合わせて再生するSPレコードのコレクションの一括寄贈を受けたことから、画・音ともにデジタル処理を施して最終的にフィルムに焼付けるというデジタル復元を『茶目子の一日』、『黒ネッコ』の2作品について行った。

実績

1. 映画フィルム洗浄 6作品(所要経費:290,985円)
映画フィルムデジタル復元 2作品(所要経費:2,766,741円)
(『茶目子の一日』(1931、西倉喜代治監督)、『黒ネッコ』(1929、大藤信郎監督)の2作品)
2. 修理の記録
洗浄を実施した映画フィルムに関しては、所蔵作品データベース上へ記録を行った。
3. 修理費 予算額121,531,000円 決算額106,399,646円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

フィルムセンターにおける「収蔵品の修復」とは、映画フィルムの「修復・復元」を意味する。これは、1本しか所蔵していないプリント、もしくは状態の不安定なプリントから、ネガ、マスター等の保存用フィルムを作成し、そこから上映用プリントを複製するものであり、現像会社の技術者との緊密な協力の下に、フィルムの化学的な側面と映画作品の内容的な側面を精査しつつ行っている。また、修復・復元に当たっては、近年技術発達の著しいデジタル技術を修復作品の特性に応じて有効に活用している。

映画フィルムの洗浄は、映写時においてフィルムの走行を円滑にするために塗布されるワックスを除去する作業を意味する。ワックスはフィルム上のしみや劣化を促進する原因となるため、フィルム保存上、重要な作業である。フィルムセンターでは企画上映等のたびにフィルム検査を行い、必要に応じて現像会社へ洗浄の発注を行っている。

【見直し又は改善を要する点】

映画フィルムの洗浄の全収蔵フィルムに対しての実施は、量的にも経費的にも困難なため、今後は収蔵フィルムの中で優先順位を決定した上で、計画的に実施していく必要がある。

デジタル技術を活用した修復・復元技術については、まだ実験的な点が多く、今後とも調査検討を重ねる必要があるが、併せてデジタル媒体での保存についても調査することが重要と考える。

【計画を達成するために障害となっている点】

所蔵フィルムのデジタル媒体への複製(DVD化など)は、特にニュース映画、文化・記録映画などの活用のためには有効な手段であり、著作権保護期間が満了しているものを中心に行っているが、我が国の映画界では「パブリック・ドメイン」

という認識が成熟していないため、DVD等によって積極的な活用を図るに当たっては、権利関係を綿密に追跡調査した上で、旧著作権者との合意を慎重に形成する必要がある。そうした権利問題を専門的に調査する人員を確保できないことが大きな障害となっている。

* 添付資料

修理した映画フィルム件数の推移(事業実績統計表 p.3)

修理した映画フィルムの一覧(事業実績統計表 p.41)

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会・企画上映等の状況

中期計画

- (1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。
- (1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。
- (1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施に当たっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(東京国立近代美術館)

フィルムセンター 年5～6番組程度

- (1)-4 展覧会を開催するに当たっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。
- (1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。
- (1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。
なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。
また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。
- (2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。
- (3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

実績(総括表)

1. 上映会 11番組(中期計画記載回数:年5～6番組)

(1) 企画上映(特別企画上映)

- 「生誕百年特集 映画監督 稲垣浩」
- 「生誕百年特集 映画監督 豊田四郎」
- 「発掘された映画たち2005」
- 「生誕百年特集 映画監督 成瀬巳喜男」
- 「生誕百年特集 映画監督 斎藤寅二郎と野村浩将」
- 「日韓友情年2005 韓国リアリズム映画の開拓者 兪賢穆監督特集」
- 「シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち」
- 「松竹創業110周年記念 松竹映画探索 1960-70年代」
- 「日本におけるドイツ 2005/2006 NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」

(2) 共催上映

- 「ポーランド映画、昨日と今日」
- 「第6回東京フィルメックス 特集上映 生誕百年特集 映画監督 中川信夫 ～地獄のアルチザン～」

2. 展覧会 3回

「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展

(併設:「展覧会 映画遺産 - 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展)

「ポーランドの映画ポスター」展

(併設:「展覧会 映画遺産 - 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展)

「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展

(併設:「展覧会 映画遺産 - 東京国立近代美術館フィルムセンター・コレクションより」展)

3. 特別展示

「『浮雲』再現セット」(4,764人)

4. 入館者数 138,787人(目標入館者数110,000人/当初計画103,500人)

(1) 上映会 128,365人

(対昨年度実績比141.13%、目標入館者数98,500人/当初計画91,000人)

(昨年度実績/入館者数:90,865人、上映日数:284日、上映回数:618回)

目標入館者数は、過去の同種企画上映の1回当たりの平均入館者数を参考として開催回数を乗じて算出。

(2) 展覧会 10,422人

(対昨年度実績比80.86%、目標入館者数11,500人/当初計画12,500人)

(昨年度実績/入館者数:12,889人、開催日数:284日)

目標入館者数は、過去の同種展覧会の1日当たりの平均入館者数を参考として開催日数を乗じて算出。

5. 優秀映画鑑賞推進事業 183会場(目標会場数130会場以上)

6. 地方における共催上映 2件

コミュニティシネマ支援センターによる成瀬巳喜男監督作品巡回事業

「成瀬巳喜男生誕100年記念 映画監督成瀬巳喜男 レトロスペクティブ 巡回事業」

平成17年10月9日～12月17日、平成18年1月9日～3月19日

成瀬巳喜男監督の生誕百年を記念して、全国の公共上映施設を巡回する上記事業に共催し、所蔵プリント4本を提供したほか、上映カタログを発行した。

7. 海外における共催上映 2件

ニューヨーク近代美術館における日本映画名作選

「Early Autumn: Masterworks of Japanese Cinema from the National Film Center, Tokyo」

平成17年9月14日～平成18年1月18日

新たに英語字幕を付した多数のプリントを含む日本映画の名作52本を提供し、大規模な上映会を共同開催した。作品選定の段階からフィルムセンターが全面的に関わり、上映に際してはフィルムセンターが編集するカタログを刊行するとともに、開幕時及び期間中に研究員が現地へ渡って作品紹介を実施した。この企画のために作成された英語字幕付きプリントは、今後フィルムセンターが行う日本の古典映画の海外普及に役立てたい。

ポルデノーネ無声映画祭における日本映画特集

「Light from the East: Celebrating Japanese Cinema」

平成17年10月7日～平成17年10月16日

成瀬巳喜男監督の生誕百年と松竹創業110周年を記念し、松竹株式会社の全面的な協力を得て、松竹作品を中心とする英語字幕付きの無声映画22作品を提供し、2001年の同映画祭での日本映画特集に続く上映会を実施した。この共催が好評を受けたことが、パンフィック・フィルム・アーカイヴ(米国)やシネマテーク・フランセーズ(フランス)への上映へとつながった。

8. 上映会開催経費 予算額85,043,164円 決算額77,940,969円

9. 特記事項

上映スケジュールの策定は、フィルムセンター所蔵作品を基に行っているが、年度開始後、映画製作会社から新たに購入した作品を上映計画に追加して実施することで、その内容の充実を図ることができる。

平成17年度は、稲垣稲垣浩、成瀬巳喜男、斎藤寅二郎及び野村浩将の各監督の作品を追加購入したことにより、それぞれの企画上映の1日当たりの上映回数を増やすなど企画の内容を充実した。

また、特別企画上映「シネマの冒険 闇と音楽」では、ドイツ映画のピアノ伴奏付き上映を予定していたが、企画内容の見直しやピアニストの招聘日程の都合から、上映企画「NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」の会期中に実施することとした。このため両企画の会期を変更した。

共催上映「ポーランド映画、昨日と今日」は、2005年日本国際博覧会「愛・地球博」ポーランド館を出展したポーランド商工会議所から平成17年度独立行政法人国立美術館年度計画策定後に打診があり、ポーランド商工会議所と共催とすることで実現した企画であり、展示企画「ポーランドの映画ポスター」は、この上映企画の実施に伴い新たに計画して実施した。

上映企画「松竹映画探索 1960-70年代」と展示企画「松竹と映画」については、松竹との共同開催の予定だったが分離開催となったため、開催上映・展示日数を変更した。なお、結果として、「松竹映画探索 1960-70年代」の上映期間及び「松竹と映画」の展示期間の短縮された分を、企画上映「ポーランド映画、昨日と今日」及び展示企画「ポーランドの映画ポスター」で補った。

以上のことにより、全体として、当初の上映・展示の目標入館者数103,500人より6,500人増加した110,000人を目標入館者数とした。

目標入館者数変更企画一覧表

上映企画名	当初目標入館者数	変更目標入館者数	差	変更理由
【上映】				
生誕百年特集 映画監督 稲垣浩	12,000人	14,000人	+2,000人	上映回数の増
生誕百年特集 映画監督 成瀬巳喜男	20,500人	25,500人	+5,000人	上映回数の増
生誕百年特集 映画監督 斎藤寅二郎と野村浩将	4,500人	6,000人	+1,500人	上映回数の増
シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち	3,000人	2,000人	-1,000人	上映計画の見直しに伴う会期変更
日本におけるドイツ2005/2006 NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選	16,000人	18,000人	+2,000人	上映計画の見直しに伴う会期変更
ポーランド映画、昨日と今日	(未計画)	2,000人	+2,000人	新規に開催し、結果的に「松竹映画探索」の会期縮小分を補う
松竹創業110周年記念 松竹映画探索 1960-70年代	9,000人	5,000人	-4,000人	自主企画への変更による会期縮小
小計			+7,500人	
【展示】				
ポーランドの映画ポスター	(未計画)	1,500人	+1,500人	新規に開催し、結果的に「松竹と映画」展の会期縮小分を補う
松竹創業110周年記念 松竹と映画	5,500人	3,000人	-2,500人	自主企画への変更による会期縮小
小計			-1,000人	
合計【上映+展示】			+6,500人	

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

フィルムセンターの上映企画には、フィルム・アーカイブとしての特質を活かして所蔵フィルムを有効に活用しながら、無声映画と戦後映画、日本映画と外国映画といった“古今東西”のバランスや、監督・製作国・時代・ジャンル・スタッフなどといった切り口、外部との共同開催の取組みなど、様々な視点を勘案した多彩さが求められる。さらに、フィルム・アーカイブの上映企画としても世界的水準を目指し、発掘・復元された映画や生演奏を付した無声映画の上映にも積極的に取り組んでいる。

平成17年度は日本映画の多くの重要な監督が生誕百年を迎え、この好機を捉えて「生誕百年特集」シリーズを設定し、該当する6監督の特集を上映計画の中心に据えた。海外展開に主眼を置いた中川信夫監督特集を除いて、各規模(上映日数・回数など)は従前の当該監督のどの上映会も上回るものとなった。ジャンル面からも時代劇・文芸映画・メロドラマ・喜劇・怪談映画という多様な映画が紹介され、鑑賞者にとって満足度の高い番組を実現できた。と考える。

また、収集・復元事業の最新成果を紹介する「発掘された映画たち」、現在と過去のポーランド映画を組み合わせた特集、韓国の巨匠・兪賢穆監督の日本初の本格的な特集、上記の生誕百年の監督の無声映画をピアノやアンサンブルの伴奏付きという希有な環境で鑑賞できる特集、松竹映画の1960年代から1970年代を新視点で呈示した特集、戦前期のドイツ・オーストリアの名作集など、内外の秀作を紹介するこれら企画は世界映画史の多面的な姿を提示できた。と考える。このうちポーランド特集と松竹特集は小ホールで実施したもので、今後の小ホールの活用による上映回数増

加の試みとなった。また、昨年度から試行している1日3回の上映については、平成17年度は全上映日、土曜・日曜・祝日のみ、平日のみ、の3パターンで試みた。

展示は、尾上松之助や松竹に関する資料展のほか、ポーランド映画ポスターの美術展を開催して、多様性をもたせることができた。また、生誕百年記念の企画上映「映画監督 成瀬巳喜男」では、成瀬監督の代表作『浮雲』（1955）の撮影セットの再現展示を行い、観覧者の好評を博した。

【見直し又は改善を要する点】

平成17年度は、豊田四郎監督特集や成瀬巳喜男監督特集、ドイツ・オーストリア映画特集が連日の盛況を見せ、年間入館者数が目標入館者数を大きく上回った。その一方で、個別に見ると、知名度の比較的低い内容の特集では、入館者数に関して予想外の伸び悩みとなった。具体的には、中川信夫監督特集について入館者数が目標入館者数に届かなかったほか、兪賢穆監督特集及び伴奏付き無声映画の特集など通常より高い料金設定をした企画で入館者数が目標入館者数を下回っており、今後は特別企画及び共催企画の入場料について、値下げの検討も必要である。

また、フィルムセンターでは、歴史的に評価の定まった作品のレパトリー的な上映に偏ることなく、引き続き、他の機関では実現困難な、芸術的、歴史的、文化的に優れた企画に取り組むとともに、嗜好の異なる多様な観客層を想定し、年間を通して広く国民に親しまれる番組編成を目指していきたい。これらの番組の周知、観覧者の確保のためには、情報戦略の重要性はますます高まっており、今後、企画内容に応じて広報の差別化を図っていきたい。

展覧会については、年度計画の変更により後半期、1回の企画あたりの準備期間を十分にとることができなかった。展示品の調査から解説の執筆、会場レイアウトまで余裕を持たせ、内容の充実に努めたい。

* 添付資料

入館者数の推移（事業実績統計表 p.4）

入場料収入の推移（事業実績統計表 p.7）

企画上映「生誕百年特集 映画監督 稲垣浩」

方 針

豪快な作風のスター映画によって高い人気を誇ってきた稲垣浩監督(1905 - 80)は、2005年に生誕100年を迎えた。この機会をとらえ、同監督が生涯に遺した作品を通じてその仕事を総合的に振り返る企画である。

実 績

1. 開催期間 平成17年4月5日～平成17年5月22日(42日間/100回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等 なし
4. 上映作品数 53作品/47プログラム(1プログラム2～3回上映):延100回上映
5. 入館者数 14,442人(1回平均144人)(目標入館者数14,000人/当初計画12,000人)
(一般57.41% シニア29.16% 学生4.01% 小人0.03% 無料9.39%)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 5,583,000円
8. 担当した研究員数 3人
9. 上映会の内容

片岡千恵蔵プロの時代劇監督としてデビューを果たし、無声映画からトーキーへの移行に順応して才能を開花させた稲垣監督は、明朗かつ知的な時代劇の作り手として評価を確立し、その後日本映画史の古典の地位を占める『無法松の一生』(1943)や子どもの心を描いた繊細な秀作『手をつなぐ子等』(1948)、そして1950年代以降には東宝撮影所で数々のヒット大作を発表している。この企画は、時代ごとにこうした特徴的な作品を生み出してきた同監督の映画人生全体に目を配り、これまでの同監督特集でも殆ど紹介されなかった終戦前後期の作品の上映を実現した。フィルムセンターは、同監督の一周忌に当たる1981年に当時としては最大規模の同監督特集を開催したが、今回の上映作品数はその時の約2倍に当たる53作品となった。また、「NFCニューズレター」の誌面で稲垣監督の子息であるカメラマン稲垣涌三氏へのインタビューを実施したことも新たな試みとなった。

10. 講演会等 なし
11. 広報
・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等
日本経済新聞(2005年3月14日)「生誕百年の監督特集」
公明新聞(2005年3月18日)「稲垣浩生誕百年」
しんぶん赤旗(2005年3月31日)「生誕百年特集 映画監督 稲垣浩」
協同組合通信(2005年3月31日)「生誕百年特集 映画監督 稲垣浩」
朝日新聞(2005年4月7日)「生誕百年特集 稲垣浩」
週刊文春(2005年4月7日)「生誕百年特集 稲垣浩」
毎日新聞(2005年5月19日)「生誕百年特集 稲垣浩」
Web掲載:1件
13. アンケート調査
調査期間 平成17年5月17日～平成17年5月22日(6日間)
調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 192件(母集団14,442件)有効回答数180件
アンケート結果 ・良い91.1%(164件)・普通6.7%(12件)・悪い2.2%(4件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

生誕百年を迎える稲垣監督の業績を紹介するに当たり、53作品というこれまでにない規模の企画を実現したことは、フィルム・アーカイブとしてのフィルムセンターの力を示したものと言える。『海を渡る祭禮』(1941、部分)や『狼火は上海に揚る』(1944)といった近年の発掘フィルムを上映作品に加えたことや、これまでの同監督特集では殆ど紹介されていない

終戦前後期の作品を新たに収集し上映できたことは、フィルム収集と上映企画の連携の成功を意味している。

また、「NFC ニュースレター」で稲垣監督の子息であるカメラマン稲垣涌三氏へのインタビューを実施したことや、早稲田大学所蔵「稲垣浩文庫」に関する研究(富田美香氏)を掲載したことは、新たな稲垣浩像の創造に貢献した。

【見直し又は改善を要する点】

企画内容が映画上映のみに限られ、昨今の上映界の趨勢であるイベント性に欠けたきらいがある。今後は作品の理解に資するトークショーなど、上映に関連するイベントを充実させる必要がある。また、同監督作品の中でも上映権所有者からプリントを入手できない作品があるため、引き続き購入の可能性につき交渉を続ける。

作品の大半は時代劇であったが、時代劇離れが進む昨今、この種の企画の広報にはより一層の工夫を凝らしたい。

企画上映「生誕百年特集 映画監督 豊田四郎」

方 針

数々の芳醇な文芸映画を送り出し、日本映画の艶やかな表現に貢献した監督・豊田四郎(1905 - 77)の生誕100年を祝して、現存する作品を上映してその業績を総合的に振り返る企画である。

実 績

1. 開催期間	平成17年5月31日～平成17年7月17日(42日間/84回)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等	なし
4. 上映作品数	42作品/42プログラム(1プログラム2回上映):延84回上映
5. 入館者数	18,582人(1回平均221人)(目標入館者数12,000人) (一般56.58% シニア31.29% 学生3.27% 小人0.03% 無料8.83%)
6. 入場料金	一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円
7. 入場料収入	7,183,900円
8. 担当した研究員数	3人
9. 上映会の内容	鋭い人間観察、きめの細かい演技指導を通じて、希代の演出家として不動の評価を確立した豊田監督は、石坂洋次郎原作の『若い人』(1937)を大ヒットさせた後も、著名な文学を映画化する才能と真摯なヒューマンリズムの視点が評価され、戦後も長きにわたって日本の文芸映画路線を担う巨匠として活躍を続けた。最高傑作といわれる織田作之助原作の『夫婦善哉』(1955)のほか、永井荷風、志賀直哉、川端康成から坂口安吾、谷崎潤一郎、井伏鱒二まで、名だたる文豪の話題作を映画化した。この企画では現在まで残存する映画のうち『せきれいの曲』(1951)や『花のれん』(1959)などの新規収蔵作品を含む42作品を上映し、三回忌に当たる1979年に26作品を上映した同監督の特集をしのぐ規模となった。また、「NFCニューズレター」誌上で、映画史家・田中眞澄氏と映画学研究者・藤井仁子氏による、それぞれ新視点の監督論を発表するよう依頼し、高い名声に比して評伝・作品研究書が存在しないなど、比較的関連文献の少ないこの巨匠に関する研究を深めることができた。
10. 講演会等	なし
11. 広報	・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等	朝日新聞(2005年5月19日)「生誕百年特集 映画監督 豊田四郎」 公明新聞(2005年5月20日)「映画監督 豊田四郎」 しんぶん赤旗(2005年5月26日)「映画監督 豊田四郎」 THE JAPAN TIMES(2005年5月27日)「DIRECTOR'S FESTIVAL Toyoda Centenary」 文化庁月報(2005年6月号)「生誕百年特集 映画監督 豊田四郎」(岡田秀則) 毎日新聞(2005年7月26日)「脚本家の栄光」(松田真) Web掲載:3件
13. アンケート調査	調査期間 平成17年7月12日～平成17年7月17日(6日間) 調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。 アンケート回収数 208件(母集団18,582件)有効回答数195件 アンケート結果 ・良い93.3%(182件)・普通6.2%(12件)・悪い0.5%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
現存作品の80%以上の本数を上映するという生誕百年を飾るにふさわしい規模で豊田監督の業績を振り返ることができた。こうした規模の拡大の背景としては、製作会社から新規購入したプリントの存在もあるが、2003年に復元作業を終えた戦前期の話題作『冬の宿』(1938)がこのように監督特集の枠組みで再上映されるなど、日常的なアーカイブ

活動の成果も確実に反映されている。

また、「NFC ニュースレター」誌上で、映画史家・田中眞澄氏と映画学研究者・藤井仁子氏が執筆したそれぞれ新視点の監督論は、この映画作家にまつわる最新の研究であり、学術的研究の必ずしも進んでいないこの監督の映画史における位置の理解を促すことができた。

【見直し又は改善を要する点】

「生誕百年特集 映画監督 稲垣浩」と同様の問題であるが、企画内容が映画上映のみに限られ、昨今の上映界の趨勢であるイベント性に欠けたきらいがある。今後は作品の理解に資するトークショーなど、上映に関連するイベントを充実させる必要がある。また、一部作品は上映権所有者からプリントを借用したほか、同監督作品の中でもプリントを入手できない作品があるため、引き続き購入の可能性につき交渉を続ける。

内容的に文芸映画が多いが、こうしたジャンルの紹介には、日本文学との関係を広報に活かす等の工夫も行いたい。

企画上映「発掘された映画たち2005」

方針

「発掘された映画たち」は、近年フィルムセンターが新たに発掘または復元したフィルムを上映するシリーズ企画である。5回目となる今回は、デジタル復元作品を含む多彩なフィルムを上映することで、文化遺産としての映画という認識がより普及することを目指した。

実績

1. 開催期間 平成17年7月19日～平成17年8月18日(27日間/54回)
2. 会場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共催等 なし
4. 上映作品数 56作品/27プログラム(1プログラム2回上映):延54回上映
5. 入館者数 9,726人(1回平均180人)(目標入館者数7,500人)
(一般60.11% シニア23.59% 学生7.07% 小人0.09% 無料9.14%)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 3,818,500円
8. 担当した研究員数 3人
9. 上映会の内容
上映された56作品は、ロシアの Gosfilmofond が収蔵していた戦前・戦中期の日本映画の発掘作品に加え、ドイツ、オーストリア、フィンランド、中国など世界各国のフィルム・アーカイブや、国内各地で発見された作品からなっている。その中には、戦時下の上海で製作された『萬世流芳』(1943)、そして作曲家・貴志康一がドイツで製作した『鏡』(1933)と『春』(1934)など、これまで日本で現存が確認されていなかった映画史的に貴重な作品も含まれており、また、染色フィルムとしても重要な日活版『関東大震災』(1923)や、我が国独自のカラー・システム「コニカラー・システム」を復元した『赤い陣羽織』(1958)といった映画技術史上のトピックとなる作品も上映した。さらに、アジア初の長篇アニメ『鉄扇公主』(1941)の日本語吹替版と人気漫画『サザエさん』の初映画化版(1948)は、漫画やアニメーションの研究者などに注目された。その他、国際的評価が高まっている清水宏監督の3作品や、デジタル復元活動の成果として『新・平家物語』(1955)などを上映した。日本の実験映画の先駆けとなった『銀輪』(1955)の上映に際しては映画監督・松本俊夫氏のトークショーも実施した。
10. 講演会等 松本俊夫氏(映画監督)のトークショー(8月18日)
11. 広報
 - ・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
 - ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
 - ・テレビ・ラジオの報道番組への情報提供。各上映作品の関係者への情報提供。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等
 - 東京新聞(2005年6月24日)「映画は復元したけれど」(嵐寛ファン)
 - 朝日新聞(2005年6月25日)「銀幕の李香欄よみがえる」
 - 神奈川新聞(2005年7月1日)「よみがえる幻の映像」
 - 毎日新聞(2005年7月5日)「発掘された映画たち」
 - 産経新聞(2005年7月15日)「時代が薫る お宝映像」(松本明子)
 - 読売新聞(2005年7月15日)「幻の作品 一堂に」(山根貞男)
 - 日本経済新聞(2005年7月24日)「実験映像『銀輪』」(松本ノ宝)
 - 文化庁月報(2005年7月号)「発掘された映画たち2005」(板倉史明)
 - 芸術新潮(2005年7月号)「古くて新しい 発掘された映画を見逃すな」
 - 読売新聞(2005年8月6日)「快傑ハヤブサ」
 - 朝日新聞(2005年8月23日)「あだ花に終わらぬ『満映』」(隈元信一)
 - 東京人 221(2005年12月)「昨今、日本映画発掘情報」(田中真澄)Web掲載:13件
13. アンケート調査
調査期間 平成17年8月16日～平成17年8月18日(3日間)

調査方法	入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数	118件(母集団9,726件)有効回答数108件
アンケート結果	・良い87.0%(94件)・普通10.2%(11件)・悪い2.8%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本企画は話題性のある作品を数多く上映したため、テレビ、ラジオ、雑誌、新聞など、多くのメディアが注目することとなり、フィルムセンターの基盤的な活動であるフィルムの収集・復元・研究事業の成果を多くの人々に周知することができた。特に、李香蘭(山口淑子)主演の『萬世流芳』や、戦前の夭折の作曲家・貴志康一がドイツで製作した『鏡』と『春』、そして関東大震災直後の惨状を克明に撮影した日活版『関東大震災』の上映には多くの入館者があった。また、8月18日には、長い間失われていたと思われていた『銀輪』の上映後に、松本俊夫監督による『銀輪』の製作過程などの興味深い話題によるトークショーを開催した。

さらに、フィルムセンターが角川映画株式会社と共同で初めて取り組み、褪色したカラーフィルムから鮮明な色彩を再現したデジタル復元版の『新・平家物語』(溝口健二監督)を上映し、好評を博した。

アジア初の長篇アニメ『鉄扇公主』の日本語吹替版(『西遊記 鐵扇公主の巻』)と、長谷川町子原作の人気漫画『サザエさん』の初映画化作品は、映画ファンだけでなく、漫画・アニメーション研究者や愛好家に注目された。

【見直し又は改善を要する点】

本企画の中でもっとも注目された『萬世流芳』は、テレビ、雑誌、新聞などで大きく取り上げられた。そのため計2回の上映では定員を超える入場者が来館し、映画を見られない状況となった。今後は、希望者数の想定に見合った回数の上映を計画すること、また後日アンコール上映を行うなどの対応を考えていきたい。

企画上映「生誕百年特集 映画監督 成瀬巳喜男」

方 針

2005年に生誕百年を迎えた日本の映画監督を顕彰する企画上映のひとつとして、世界的な評価を得ている成瀬巳喜男監督(1905 - 69)の作品群を上映した。長年フィルム上映のできなかった作品を加えた大規模の回顧上映を実施することで、稀代の映画芸術家の全体像の把握を試みたものである。

実 績

1. 開催期間	平成17年8月20日～平成17年10月30日(61日間/181回)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等	なし
4. 上映作品数	61作品/57プログラム(1プログラム3～4回上映):延181回上映
5. 入館者数	41,982人(1回平均232人)(目標入館者数25,500人/当初計画20,500人) (一般65.75% シニア22.29% 学生5.72% 小人0.01% 無料6.23%)
6. 入場料金	一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円
7. 入場料収入	17,329,800円
8. 担当した研究員数	4人
9. 上映会の内容	1930年に監督デビューを果たした成瀬巳喜男は、生涯に90本近い作品を監督したが、本企画では現存する最古の作品『腰辨頑張れ』(1931)から1967年の遺作『乱れ雲』まで計61作品を上映した。これまで上映する機会の少なかった松竹蒲田撮影所時代の無声作品5本や、東宝の前身であるP.C.L.映画製作所の作品群、さらに、一部分ではあるが、戦時下に監督した『上海の月』(1941)や『勝利の日まで』(1945)というフィルムセンターにしか収蔵していない作品も上映した。戦後の作品では、『めし』(1951)、『浮雲』(1955)、『放浪記』(1962)、『乱れる』(1964)をはじめ、成瀬監督の殆どの代表作を網羅することで、成瀬作品の特質を検証した。なお、特別企画として「成瀬巳喜男シンポジウム」を開催し、ドキュメンタリー映画の上映と当時のスタッフによるトークを通じて、成瀬監督や作品にまつわる背景を明らかにすることができた。
10. 講演会等	実施回数計1回(年度計画記載回数:講演会1回)、参加人数計310人 ・「特別企画 成瀬巳喜男シンポジウム」(平成17年8月20日、大ホール)
11. 広報	・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。 ・衛星放送(NHK-BS)の成瀬監督作品放映の広報番組、成瀬監督関連ドキュメンタリー番組における紹介。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等	産経新聞(2005年5月18日)「『ささいな出来事』の魅力」(山根貞男) 週刊文春(2005年6月9日)「女優で綴る成瀬巳喜男の世界」(山根貞男) 東京新聞(2005年8月16日)「成瀬巳喜男監督を特集」(路) 文化庁月報(2005年8月号)「生誕百年特集 映画監督 成瀬巳喜男」(岡田秀則) 日本経済新聞(2005年9月12日)「成瀬巳喜男監督特集『風化していく原風景』」(宇田川幸洋) 思想運動(2005年9月15日)「成瀬作品の“映画の可能性”が今ふたたび」(遠藤裕二) 芸術新潮(2005年9月号)「この秋はフィルムセンターで成瀬にはまる」 STUDIO VOICE(2005年9月号)「成瀬巳喜男は偉大な映画作家である」(北小路隆志) 東京新聞(2005年10月18日)「成瀬映画礼賛」(山下柚実) CG WORLD(2005年10月号)「生誕百年記念特集 映画監督成瀬巳喜男」 Web掲載:2件 テレビ放映:2件(NHK-BS)
13. アンケート調査	調査期間 平成17年10月25日～平成17年10月30日(6日間)

調査方法	入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数	338件(母集団41,982件)有効回答数327件
アンケート結果	・良い97.6%(319件)・普通2.1%(7件)・悪い0.3%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

生誕百年を迎えた成瀬監督については、各メディアが特集を組むなど大きく取り上げられていたため、本企画に対する注目度は極めて高かった。結果として、満席になる上映回が複数発生し、目標入館者数を大幅に上回る入館者数を記録した。また、代表作だけでなく、フィルムセンターしか保持していない珍しい作品や一部分しか残っていない作品でも多くの入館者数を記録したことにより、このような作品の上映意義を改めて確認することができたので、今後の上映企画作りに活かしていきたい。

また、本企画の初日である8月20日に開催したシンポジウムには、定員を上回る入場希望者が来館した。開催を成瀬監督の生誕日に設定したことも、話題作りや入館者数の増加に貢献したと考える。

【見直し又は改善を要する点】

最終的な上映作品リストの決定時期が、映画会社との出品交渉などの事情で遅れてしまった。そのため、他の企画に比べると広報活動を開始する時期が若干遅れてしまう結果となった。結果としては遅れたための悪影響はなかったが、今後は広報活動が十分に実施できる時期に上映作品を決定していきたい。

企画上映「生誕百年特集 映画監督 斎藤寅二郎と野村浩将」

方 針

生誕百年を迎えた日本の映画監督を顕彰する連続企画のひとつである。喜劇映画を得意とした斎藤寅二郎監督(1905 - 82)と、『愛染かつら』(1938)などのメロドラマ作家として一時代を築いた野村浩将監督(1905 - 79)の作品群を計28本上映することを通じて、喜劇とメロドラマという娯楽映画の二大ジャンルを探究し、そこに通底する共通点を明らかにすることを目指した。

実 績

1. 開催期間 平成17年11月1日～平成17年11月18日(16日間/43回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等 なし
4. 上映作品数 28作品/22プログラム(1プログラム1～2回上映):延43回上映
5. 入館者数 6,045人(1回平均141人)(目標入館者数6,000人/当初計画4,500人)
(一般56.58% シニア29.38% 学生2.68% 小人0% 無料11.36%)
6. 入場料金 一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円
7. 入場料収入 2,291,400円
8. 担当した研究員数 3人
9. 上映会の内容
斎藤監督作品については、14作品を上映した。作品選定に当たっては、『エノケンの法界坊』(1938)や『東京五人男』(1945)といった代表作のほか、これまで上映機会の少なかった『突貫驛長』(1945)や『花吹雪 御存知七人男』(1954)なども上映した。さらに、近年「映画保存協会」が発見した無声映画『モダン怪談100,000,000円』(1929)や、『のど自慢狂時代』(1949)、『青空天使』(1950)などの復元作品も上映することで、アーカイブでの上映としての特性を色濃く出した。
野村監督作品については、1986年の松竹蒲田撮影所特集の際に7作品を上映したが、今回は新たな収蔵作品を加えて13作品を上映した。野村監督の代表作は『人妻椿』(1936)や『愛染かつら』などの女性を主人公とするメロドラマであるが、今回はその他にも、初期のヒット作である「与太者」シリーズ4本や、上映機会の少ない『舞台姿』(1940)も紹介した。
10. 講演会等 なし
11. 広報
・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
・『モダン怪談100,000,000円』を復元した映画保存協会を通じての広報。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等
文化庁月報(2005年9月号)「生誕百年特集 映画監督 斎藤寅二郎と野村浩将」(板倉史明)
読売新聞(2005年10月21日)「斎藤寅次郎と野村浩将の特集上映会」
しんぶん赤旗(2005年10月27日)「生誕百年 斎藤寅次郎と野村浩将」
朝日新聞(2005年10月28日)「生誕百年 映画監督 斎藤寅次郎と野村浩将」
東京新聞(2005年11月1日)「生誕百年特集 映画監督 斎藤寅次郎と野村浩将」
しんぶん赤旗(2005年11月4日)「よみがえるナンセンス喜劇」(娯楽映画研究家)
Web掲載:8件
13. アンケート調査
調査期間 平成17年11月12日～平成17年11月18日(6日間)
調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 202件(母集団6,054件)有効回答数183件
アンケート結果 ・良い81.4%(149件)・普通15.9%(29件)・悪い12.7%(5件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

斎藤監督作品については、映画愛好家や研究者に知られている代表作だけでなく、これまで上映機会が殆どなかったため注目されてこなかった『突貫驛長』や『花吹雪 御存知七人男』なども上映することを通じて、同監督の喜劇映画がもつ多様な側面を抽出することができた。

野村監督は、一部の専門家を除いて、『人妻椿』や『愛染かつら』といった代表作のみによって知られる監督であった。しかし、今回は代表作だけでなく、初期のヒット作である「与太者」シリーズ4本を含む上映機会の少ない作品群を上映することによって、野村浩将という映画作家を初めて本格的に紹介することができた。

また、喜劇とメロドラマは異なるジャンルとして認識されることが多いが、喜劇映画を得意とした斎藤作品とメロドラマを得意とした野村監督作品を並置することにより、二つのジャンルの共通点と類似性を再発見することができた。

【見直し又は改善を要する点】

これまで上映機会があまりなかった野村監督の初期の代表作「与太者」シリーズを4本上映することによって、野村監督作品が一貫して保持する喜劇性とメロドラマ性を際立たせることができたが、他の同監督作品と比較すると集客は振るわなかった。今後は作品選定の意図をより明確にアピールしていきたい。

特別企画上映「日韓友情年2005 韓国リアリズム映画の開拓者 兪賢穆監督特集」

方 針

2005年日韓友情年を記念して、申相玉(シン・サンオク)、金綺泳(キム・ギヨン)らとともに韓国映画の第1次黄金期を牽引した巨匠・兪賢穆(ユ・ヒョンモク)監督(1923-)の代表作を日本語字幕付きで上映し、韓国映画史の再発見に資する企画である。文化庁のほか、韓国映像資料院と福岡市総合図書館の協力を得た。

実 績

1. 開催期間	平成17年12月6日～平成17年12月25日(18日間/35回)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等	協力:文化庁、韓国映像資料院、福岡市総合図書館 後援:駐日韓国大使館韓国文化院
4. 上映作品数	12作品/12プログラム(1プログラム2～3回上映):延35回上映
5. 入館者数	2,933人(1回平均84人)(目標入館者数3,000人) (一般68.12% シニア13.91% 学生6.92% 小人0% 無料11.05%)
6. 入場料金	一般800円、高校・大学生・シニア600円、小・中学生400円
7. 入場料収入	1,965,000円
8. 担当した研究員数	3人
9. 上映会の内容	フィルムセンターとしては、平成14(2002)年度に「韓国映画 栄光の1960年代」を開催して以来2回目の韓国映画特集となるが、今回は、これまで日本でまとめて紹介される機会のなかった兪監督の業績に焦点を当てることとした。『誤弾』(1961)や『カインの後裔』(1968)などの秀作を発表し、韓国映画史上の最重要人物の一人である兪監督が発表した42本のうち、12本の主要作品を上映し、長く本場で「芸術映画の巨匠」と呼ばれた多彩な作風をたどった。上映プリントは、ともにフィルム・アーカイブである韓国映像資料院と福岡市総合図書館の所蔵するプリントを借用したほか、オープニングに際しては、監督夫妻と韓国映像資料院の李孝仁(イ・ヒョイン)院長を招聘し、開幕レセプションと監督による舞台挨拶を実施した。また、監督インタビューや作品論、詳細なフィルムグラフィーを掲載したカタログを発行した。
10. 講演会等	なし
11. 広報	・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。 ・韓国文化を紹介するテレビ番組・新聞・雑誌への働きかけ(NHK「ハングル語講座」においてインタビューが実施される)。チラシを韓国語学校・アジア雑貨店・在日コリアン向け教会などへ配布。韓国文化研究者への情報提供。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等	民団新聞(2005年11月30日)「韓国リアリズム映画」 文化庁月報(2005年11月号)「ユ・ヒョンモク監督特集」(岡田秀則) 東洋経済新報(2005年12月2日)「ユ・ヒョンモク監督作品を特集上映」 しんぶん赤旗(2005年12月2日)「韓国芸術映画の巨匠」 日本経済新聞(2005年12月7日)「韓国映画の巨匠 ユ・ヒョンモク監督を特集」 Web掲載:25件 テレビ放映:1件(NHK)
13. アンケート調査	調査期間 平成17年12月20日～平成17年12月25日(6日間) 調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。 アンケート回収数 98件(母集団2,933件)有効回答数94件 アンケート結果 ・良い87.2%(82件)・普通9.6%(9件)・悪い3.2%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

2002年の「韓国映画 栄光の1960年代」でも痛感したが、近年の韓国映画ブームの中であって、古典的な韓国映画への日本人の関心はまだまだ低い。そうした状況をあえて打破しようと意図したこの特集は、韓国映画史上の巨匠に対する綿密な調査・研究をベースに実施された。研究員が韓国に渡り、主要作品の視聴や監督本人との交渉を通じて上映作品を選定し、同監督の経歴・演出スタイル・映画史上の位置付けなどを行った研究成果は、発行したカタログにも反映している。上映フィルムは韓国映像資料院及び福岡市総合図書館から借用したが、こうしたフィルム・アーカイブ間の日頃の連携が実を結んだ点でも意義深い。また、80歳となる監督の来日は韓国映画の熱心なファンを刺激し、この企画の盛り上がりにも貢献した。広報面では、予想外ながら韓国の大手メディアにおける報道が目立ち、そのすべてが、自国の巨匠監督を本格的に日本の映画専門機関が取り上げたことを評価する論調であり、フィルムセンターの先駆性が認められるとともに、日韓映画交流の促進への足がかりとなった。

【見直し又は改善を要する点】

わずかに目標入館者数に届かなかった。本国における監督への国民的な尊敬と作品の質の高さを考えれば、知名度の低い日本でも実施する価値は疑いようがないだけに、広報の専門家に委託するなど、広報戦略のあり方を再考する必要がある。また、本国の上映権所有者の一部が上映に難色を示したため、上映する作品数が減少して1作品当たりの上映回数が増加、来場者が分散してしまったこともその原因になった。代替可能な残存作品は少なく、これについては対策の立案が困難であった。

特別企画上映「シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち」

方 針

無声映画に伴奏音楽などを付して上映するフィルムセンター恒例の企画であり、無声映画の魅力を伴奏音楽によってより生き生きと伝えることを目指した。今回は、2005年に生誕百年を迎えた日本の映画監督4人の無声作品12本を、10番組に構成して上映した。

実 績

1. 開催期間 平成18年1月5日～平成18年1月15日(10日間/20回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等 なし
4. 上映作品数 12作品/10プログラム(1プログラム2回上映):延20回上映
5. 入館者数 1,883人(1回平均94人)(目標入館者数2,000人/当初計画3,000人)
(一般71.11% シニア11.15% 学生7.22% 小人0.16% 無料10.36%)
6. 入場料金 一般1,000円、高校・大学生・シニア800円、小・中学生600円
7. 入場料収入 1,617,600円
8. 担当した研究員数 3人
9. 上映会の内容
2005年に生誕百年を迎えた4人の監督(斎藤寅二郎、成瀬巳喜男、野村浩将、稲垣浩)の作品を計12本上映した。斎藤監督作品は『石川五右衛門の法事』(1930)と、平成17年度に新たに収録した『モダン怪談 100,000,000円』を上映した。成瀬監督作品は、彼の現存する全無声作品(5作品)を上映した。野村監督作品は、フィルムセンター初上映となる『與太者と縁談』(1932)を含む4本を上映。また、稲垣監督作品は、『諧謔三浪士』(1930)を上映した。
伴奏者は、天池穂高氏、小原孝氏、小林弘人氏、松村牧亜氏、柳下美恵氏、谷川賢作氏の6名であった。なお、1月5日の2公演のみ、グループ名「谷川賢作 Sonorizzano」として、谷川氏(ピアノ)のほか、三木黄太氏(チェロ)、酒井聡行氏(アルトサクソ、フルート)、小竹満里氏(パーカッション、マリンバ)が参加して演奏を行った。
10. 講演会等 なし
11. 広報
 - ・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
 - ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
 - ・クラシック音楽・ピアノ雑誌(ムジカノーヴァ、クラシックジャーナルなど)への働きかけ。コンサート会場へのチラシ配布。コンサート情報紹介ウェブサイトへの情報提供。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等
 - 文化庁月報(2005年12月号)「シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち」(板倉史明)
 - ムジカノーヴァ(2005年4月号)「アメリカ無声映画の傑作をピアノ伴奏とともに」(ヒリップ・カーリー)
 - 読売新聞(2006年1月6日)「シネマの冒険 闇と音楽」
 - 読売新聞(2006年1月11日)「シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち」
 - しんぶん赤旗(2005年12月22日)「シネマの冒険 闇と音楽」
 - 映像新聞(2005年12月26日)「無声映画をピアノ伴奏付きで上映」
 - 聖教新聞(2005年12月26日)「生誕百年の監督たち」
 - キネマ旬報(2006年1月上旬号)「シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち」
 - 常陽藝文(2006年1月号)「シネマの冒険 闇と音楽:生誕百年の監督たち」
 - シネフロント(2005年11月・12月合併号)「シネマの冒険」
 - 読売ウィークリー(2006年1月8日～15日号合併)「シネマの冒険 闇と音楽:生誕百年の監督たち」
 - ムジカノーヴァ(2006年1月号)「ピアノ生伴奏付きサイレント映画の上映会シネマの冒険 闇と音楽 生誕百年の監督たち」(小原孝)
- Web掲載:9件
- ラジオ放送:1件(inter FM)
13. アンケート調査

調査期間	平成18年1月5日～平成18年1月15日(10日間)
調査方法	入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数	135件(母集団1,883件)有効回答数118件
アンケート結果	・良い93.2%(110件)・普通5.9%(7件)・悪い0.9%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

今回は生誕100年を迎えた日本映画監督の作品に焦点を絞り、ピアノ単独の伴奏だけでなく、グループによる伴奏も取り入れることによって、無声映画に伴奏音楽を付ける近年のアーカイブにおける上映の趨勢の中で、多様な演奏のあり方を模索した。

【見直し又は改善を要する点】

現代の演奏者たちが、現代の視点から無声映画に伴奏音楽を付けるという本企画の試みは、広く受け入れられるようになっているが、その一方で、過去の伴奏音楽の実態を調査し、当時の伴奏音楽を復元する研究活動も今後は進めていきたい。稲垣浩監督、成瀬巳喜男監督、斎藤寅二郎監督、野村浩将監督の「生誕100年特集」で既に上映した作品が、全12作品中9作品あったこともあり、作品によっては入館者数があまり伸びないものもあった。個別の作品につき伴奏あり・伴奏なしの選択が可能になったことはプラスであるが、一度上映したという結果が本企画での集客の減少につながったことは認めざるを得ず、その教訓を今後の番組作りに反映させていきたい。

企画上映「松竹創業110周年記念 松竹映画探索 1960 - 70年代」

方 針

松竹株式会社の創業110周年を記念して、松竹映画の歴史の中でも比較的振り返られることの少ない1960年代と1970年代の作品34本を、5つのテーマに沿って選んだ企画である。いわゆる日本映画の“黄金時代”と言われる1950年代の後に、新感覚の監督や俳優が台頭してきた松竹映画の野心的な時代に照準を当てた。

実 績

1. 開催期間	平成18年1月13日～平成18年3月26日(33日間/66回)(金曜・土曜・日曜の上映)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター地下1階小ホール
3. 共 催 等	なし
4. 上映作品数	34作品 / 33プログラム(1プログラム2回上映):延66回上映
5. 入館者数	5,053人(1回平均77人)(目標入館者数5,000人/当初計画9,000人) (一般60.56% シニア21.47% 学生4.67% 小人0.22% 無料13.08%)
6. 入場料金	一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円
7. 入場料収入	1,927,400円
8. 担当した研究員数	2人
9. 上映会の内容	この時代の松竹映画を代表する意味で、「松竹ヌーヴェルヴァーグ1960年」「喜劇」「SF映画」「サスペンス映画」「青春映画」という5つのテーマを設定したこの企画は、上映機会の少ない作品を積極的に選択しつつ、松竹が主催企画として行った「野村芳太郎監督特集」(2005年8月13日～9月2日)や「松竹110年祭」(同年11月19日～12月16日)とも内容的に重ならないように番組作りを行った。その結果、いわゆる“松竹ヌーヴェルヴァーグ”世代の中でも顧みられることの少ない高橋治、田村孟、森川英太郎といった新感覚の映画作家たちに脚光を当てたほか、プログラム・ピクチャー(低予算の量産娯楽映画)の枠内で優れた演出力を発揮してきた前田陽一、瀬川昌治、森崎東、貞永方久、山根成之といった監督たちの力量を示すことにもなった。上映作品には多くのニュープリントが含まれ、松竹の長い伝統の中でも独自の輝きを見せた一時代を通じて、松竹映画史の全体像を浮かび上がらせ、その理解を促す企画となった。
10. 講演会等	なし
11. 広報	・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。 ・日本の伝統文化紹介雑誌、博物館・美術館紹介雑誌への働きかけ。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等	産経新聞(2005年1月7日)「松竹映画探索 1960 - 70の輝き」 朝日新聞(2006年1月11日)「ツウな松竹映画、再上映」 東京新聞(2006年1月17日)「ヌーベルヴァーグ中心に特集上映」 産経新聞(2006年1月25日)「松竹創業110周年記念松竹と映画」 常陽藝文(2006年1月号)「松竹創立110周年記念 松竹映画再発見 松竹と映画」 ビクトアップ(2006年2月号)「松竹映画の傑作:秀作に会える貴重な特集上映シリーズ！」 brain(ブレイン)(2006年2月号)「あの映画を一挙公開、松竹映画探索 1960～70年代」 TOKINO(2006年2月号)「威厳と歴史を持つ巨匠「松竹」が、2005年創業110周年！！」 シネフロント(2005年11月・12月合併号)「松竹映画探索」 しんぶん赤旗(平成18年1月12日)「松竹映画探索1960～70年代」 常陽藝文2006.1月号(2006年2月号)「松竹創立110周年記念 松竹映画再発見」 フラッシュ(2006年2月7日号)「松竹110周年を記念して名作を再上映 邦画黄金期を肌で感じるイチオシ5作」 クランク(2006年2月号)「松竹映画探索1960～70年代」 メトロ沿線だより(2006年2月号)「松竹創業110周年記念松竹映画探索1970 - 1970年代」 amour(アムール)(2006年2月号)「松竹創業110周年記念松竹映画探索1960 - 70年代」 In red(2006年3月号)「松竹映画探索1960 - 70年代」 ソトコト(2006年3月号)「松竹創業110周年記念松竹映画探索1960～70年代」

常陽藝文2006.3月号(2006年2月号)「松竹創立110周年記念 松竹映画再発見」
和のしつらいを楽しむ(2006年3月20日発売)「松竹創立110周年記念 松竹と映画」
Esquire(2006年3月号)「松竹映画探索1960～70年代」
キネマ旬報2006年3月上旬号「松竹映画探索1960 - 70年代」
東京メトロ沿線だより(2006年3月号)「松竹創業110周年記念松竹映画探索1960 - 70年代」
Web掲載:6件

13. アンケート調査

調査期間 平成18年3月24日～平成18年3月6日(3日間)

調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。

アンケート回収数 82件(母集団5,053件)有効回答数69件

アンケート結果 ・良い82.6%(57件)・普通11.6%(8件)・悪い5.8%(4件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

フィルムセンターにとって、小ホールで単独主催による所蔵作品の上映会を実施したのは、京橋の新館を開館した1995年以来のことであり、これにより大小2ホールによる上映態勢を作り、上映活動の活発化を促した。また、この上映は、当初は松竹との共催で検討されていたが、最終的に両者が単独で別々の企画を行うことになった経緯がある。このことは残念な結果である一方、松竹史のいわば“王道”を選んだ同社主催の「松竹110年祭」と重複しない路線を模索したフィルムセンターが、番組編成の面で研究機関としての独自性を発揮することにもなった。映画史の中で言及されやすい代表的な名作や路線だけを打ち出すのではなく、その周縁にある低予算娯楽篇の作品ならではの豊かさを示すことができ、かつては名作上映が中心だったフィルムセンター企画が、近年獲得しつつある幅の広さを提示できたと考える。

また、金曜・土曜・日曜のみの上映という新しい形態は、働いている人の来館を促し、知名度の高くない作品であっても一定数の来場者をコンスタントに得ることができた。また、上映作品の関連資料(『宇宙大怪獣ギララ』模型など)を展示室での企画「松竹と映画」で展示したこと、上映作品の監督に展示企画のギャラリートークを依頼したことなど、展示企画との連携も積極的に行った。

【見直し又は改善を要する点】

当初は、松竹との共同開催を予定していた本特集であったが、それぞれが単独の上映企画を行うこととなり、そのことが他の上映企画の日程調整等に影響を与えることとなった。

企画上映・特別企画上映「日本におけるドイツ2005 / 2006 NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」

方 針

フィルムセンター所蔵のドイツ・オーストリア映画の中から、1920年代から1930年代の作品を中心に、短篇・長篇合わせて90本の映画を上映した。1920年代初頭のドイツ表現主義映画や1930年代初頭の音楽映画といった知名度のある作品だけでなく、近年まで殆ど顧みられることのなかった1930年代中期から後期のドイツ・オーストリア映画にも焦点を当てて企画を組んだ。このことによって、戦前・戦中のドイツ・オーストリア映画史を俯瞰する視点を紹介しようと試みた。さらに、ドイツから無声映画伴奏(研究)者のギンター・A・ブーフヴァルト氏を招聘し、一部の無声映画作品上映に伴奏音楽を付すことによって、世界的水準の伴奏音楽を提供するとともに、この分野に関する最新の研究を導入した。

実 績

1. 開催期間	平成18年1月17日～平成18年3月26日(60日間/120回)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等	なし
4. 上映作品数	90作品/52プログラム(1プログラム2～3回上映):延120回上映
5. 入館者数	21,140人(1回平均176人)(目標入館者数18,000人/当初計画16,000人) (一般57.62% シニア26.65% 学生6.95% 小人0.02% 無料8.76%)
6. 入場料金	通常上映:1月17日～1月29日、2月7日～3月26日 一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円 ピアノ伴奏付き上映:1月31日～2月5日 一般1,000円、高校・大学生・シニア800円、小・中学生600円
7. 入場料収入	9,153,400円
8. 担当した研究員数	4人
9. 上映会の内容	<p>本企画は、フィルムセンターが収蔵する1920年代から1930年代のドイツ・オーストリア映画90本(49本の長篇映画と41本の短篇映画)を上映した。『カリガリ博士』(1920)や『朝から夜中まで』(1921)といったドイツ表現主義映画の代表作や、字幕を極力用いない「室内劇映画」の代表作『除夜の悲劇』(1923)などの無声映画期の重要作、そして『会議は踊る』や『狂乱のモンテカルロ』(いずれも1931)といった音楽映画のほか、ベルリン・オリンピックの記録映画『民族の祭典』、『美の祭典』(いずれも1938)や世界の先駆的な学術映画であるウーファ社の文化映画(クルトゥーアフィルム)、そして、実験映画作家オスカー・フィッシングの初期作品も上映した。また、1930年代のオーストリア映画を牽引した俳優兼映画監督のヴィリ・フォルストと、当時のヨーロッパで活躍した日本人オペラ歌手・田中路子の小特集を組んだ。なお、1月31日から2月5日の期間は、無声映画の伴奏音楽家ギンター・A・ブーフヴァルト氏をドイツから招聘し、6作品のドイツ映画に伴奏音楽を付した。さらに、映画作品についての理解を深めるため、3月3日と3月14日に、専門家によるゲスト・トークを開催した。</p>
10. 講演会等	西嶋憲生(映像研究者・多摩美術大学)、平井正(元立教大学教授・ドイツ文化研究者)
11. 広報	<ul style="list-style-type: none"> ・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。 ・ドイツ年記念企画を実施している機関(森美術館、東京オペラシティ、ドイツ文化センター等)、ドイツ語学校、ドイツ語関連書店へのチラシ・ポスター配布。ドイツ系マスコミ、学会への情報提供。レンタルビデオ店(TSUTAYA渋谷店)におけるドイツ映画コーナーの設置。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等	<ul style="list-style-type: none"> 文部科学時報(2005年12月号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」(板倉史明) 週刊金曜日589号(2006年1月13日)「無声映画生演奏付き上映」(溝口彰子) 産経新聞(2006年2月15日)「田中路子の名画よみがえる、戦前 異国で恋と歌に生きる」 常陽藝文(2006年1月号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」 文化庁月報(2006年1月号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」(板倉史明) ソトコト2006.2月号「ドイツ・オーストリア映画名作選」

ピアノライブ(vol.2)「サイレント映画伴奏者が来日。ピアノ生演奏付上映会が楽しめる! ドイツ・オーストリア映画名作選」上映

しんぶん赤旗(2006年1月19日)「ドイツ・オーストリア映画名作選」

常陽藝文(2006年2月号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」

東京メトロ沿線だより(2006年2月号)「NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」

MOE(2006年3月号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」

キネ旬報(2006年2月下旬号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」

アート・トップ(2006年2月・3月号)NFC所蔵外国映画選集 「ドイツ・オーストリア映画名作選」

NHKラジオ ドイツ語講座(2006年3月号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」

クラシックジャーナル(2006年3月号)「NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」

常陽藝文(2006年3月号)「ドイツ・オーストリア映画名作選」

キネマ旬報(2006年3月上旬号)「日本におけるドイツ年 2005 / 2006」

東京メトロ沿線だより(2006年3月号)「NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」

SHIBUYA FM(2006年2月7日)「SHIBUYA VILLAGE VOICE」岡田主任研究官 生放送出演
Web掲載:15件

13. アンケート調査

調査期間 平成18年3月21日～平成18年3月26日(6日間)

調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。

アンケート回収数 239件(母集団21,140件)有効回答数222件

アンケート結果 ・良い96.8%(215件)・普通2.7%(6件)・悪い0.5%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

川喜多かしこ旧蔵の可燃性フィルムから本企画のために今回新たに復元した作品が多数含まれていたが、中でも『キリストの一生』や『東洋の秘密』は、国際的にもきわめて希少価値の高いフィルムであり、研究者からも高い注目を浴びた。ドイツから招聘した伴奏者の演奏も非常に好評であり、無声映画の伴奏音楽の魅力を多くの鑑賞者に普及させた。田中路子小特集についても、産経新聞(2月15日号)で紹介されるなど注目を浴びた。さらに、『NFCニューズレター』(65号)では、ドイツ・オーストリア映画史の研究者である瀬川裕司氏に本企画の見所などの執筆を依頼したほか、2回のゲスト・トークを開催することによって、上映のみでは計ることのできない本企画の深い専門性への理解を促した。なお、「日本におけるドイツ2005 / 2006」に参加した本企画に対して、ドイツ大使館から関連グッズの提供を受け、来場者にプレゼントとして配布した。

【見直し又は改善を要する点】

従来フィルムセンターの企画上映は、予算的な余裕のある共催事業でのみ広報用ポスターを作成してきた。しかし、フィルムセンター単独で実施した本企画においては、試験的に6枚のポスターを作成し、東京国立近代美術館本館や工芸館をはじめ、各施設に掲示した。より積極的な広報活動を実施するため、今後も企画の規模や内容によって臨機応変にポスターを作成したい。

共催上映「ポーランド映画、昨日と今日」

方 針

2005年日本国際博覧会「愛・地球博」ポーランド館を出展したポーランド商工会議所との共催のもと、ポーランド映画史上の名作と近年製作された秀作を組み合わせて上映し、その変わることのない豊かな映画文化を素描しようとしたものである。

実 績

1. 開催期間	平成17年9月13日～平成17年9月25日(12日間/24回)
2. 会 場	東京国立近代美術館フィルムセンター地下1階小ホール
3. 共 催 等	共催:ポーランド商工会議所EXPO事務局 協力:駐日ポーランド共和国大使館
4. 上映作品数	12作品/12プログラム(1プログラム2回上映):延24回上映
5. 入館者数	3,144人(1回平均131人)(目標入館者数2,000人/当初計画なし) (一般62.28% シニア21.56% 学生9.03% 小人0.03% 無料7.09%)
6. 入場料金	一般500円、高校・大学生・シニア300円、小・中学生100円
7. 入場料収入	1,267,700円
8. 担当した研究員数	3人
9. 上映会の内容	もともとこの企画は、ポーランドの巨匠アンジェイ・ワイダ監督がポーランド映画の新世代を紹介する目的で発案したものであるが、フィルムセンターが開催の主体に加わるに当たり、ポーランド映画史上の名作を加えるよう提案し、旧作と近作6作品ずつ、計12作品の上映となった。フィルムセンターにとっては15年ぶりのポーランド映画の特集であり、1950年代のいわゆる「ポーランド派」に代表される輝かしい伝統と、優秀な新世代の台頭する現代、この両者を対比する立体的な構成を形作ることができた。近作の選択にはポーランド映画史を牽引してきたワイダ監督の意向が反映しており、監督自身の近作『仕返し』(2002)を含め、近年、商業劇場で公開されにくい最新のポーランド映画が観られる貴重な機会ともなった。オープニングには駐日ポーランド大使や映画評論家マチェイ・パブリツキ氏を迎えた記者会見などが行われ、また、近作の上映に際しては、現地より提供された上映作品のポスターを展示したほか、ポーランド文化研究家・久山宏一氏の執筆・編集による詳細な解説文(ハンドアウト)を配布した。
10. 講演会等	なし
11. 広報	・印刷物(NFCカレンダー42,000部)の生涯学習施設等への配付、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。 ・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等	朝日新聞(2005年8月25日)「ポーランド映画 昨日と今日」 読売新聞(2005年8月26日)「ポーランド温故知新の秋ドイツ」 しんぶん赤旗(2005年9月8日)「新作と名作あわせて『ポーランド映画祭』」 読売新聞(2005年9月9日)「ポーランド映画 昨日と今日」 日本経済新聞(2005年9月12日)「上映会 ポーランド映画 昨日と今日」 琉球新報(2005年10月17日)「作品の発信力で最良鑑賞」(浦崎浩實) キネマ旬報(2005年11月下旬号)「ポーランド映画の 今日」(マチェイ・パブリツキ) Web掲載:2件
13. アンケート調査	調査期間 平成17年9月20日～平成17年9月25日(6日間) 調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。 アンケート回収数 246件(母集団3,144件)有効回答数224件 アンケート結果 ・良い89.3%(200件)・普通9.4%(21件)・悪い1.3%(3件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

愛知万博の関連行事として行われる機会を捉え、約6か月の準備期間で海外からの輸入・新規字幕作成プリントを含む上映企画を実施した。当初の年度計画にはなかった企画であるが、こうした外部からの要請に臨機応変に対応したことは、今後の柔軟な企画作りへの布石となった。

内容面では、当初は発案者であるアンジェイ・ワイダ監督の意向で近年の作品のみを上映するという提案がなされたが、フィルムセンターからの提案によって旧作を上映作品に含めることとした。このことは、企画規模の拡大のみならず、フィルムセンター所蔵プリントの有効活用にもつながったほか、映画大国ポーランドのイメージを来場者に印象付けることにも役立った。

また共催団体より提供のあった近作のポスターを展示したが、小ホールのホワイエでのポスター展示は初の試みであり、来場者の注目度も高かった。また、会場で配布された久山宏一氏の執筆・編集による詳細な解説文(ハンドアウト)も、映画史のみならずポーランドの歴史と文化を踏まえたその深い内容によって好評を得た。

【見直し又は改善を要する点】

上映作品のうち、フィルムセンター所蔵フィルムの中に、不備な字幕を付したプリントがみつきり、字幕の手直しや、不備の旨を通知する場内放送を行った。こうしたプリントに対しては、今後も番組編成時に再確認し、随時字幕の修正を行っていきたい。

共催上映「第6回東京フィルメックス 特集上映 生誕百年特集 映画監督 中川信夫 ～地獄のアルチザン～」

方 針

第6回東京フィルメックスとの共同開催により、怪談映画などの娯楽分野で優れた作品を発表した中川信夫監督(1905 - 84)の代表作や、知名度は低いながらも優れた作品を上映し、映画の「職人」として語られがちなこの映画作家の創造的な再発見を目指した企画である。

実 績

1. 開催期間 平成17年11月19日～平成17年11月27日(8日間/24回)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター2階大ホール
3. 共 催 等 共催:特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会
4. 上映作品数 12作品/12プログラム(1プログラム2回上映):延24回上映
5. 入館者数 3,435人(1回平均143人)(目標入館者数3,500人)
(一般65.97% シニア10.74% 学生7.10% 小人0% 無料16.19%)
6. 入場料金 一般800円、高校・大学生・シニア600円、小・中学生400円
7. 入場料収入 1,316,900円
8. 担当した研究員数 3人
9. 上映会の内容
『東海道四谷怪談』(1959)や『地獄』(1960)などの怪談映画を発表して、日本映画史に独特の地位を占める中川監督は2005年に生誕百年を迎えた。フィルムセンターではこれを記念して第6回を迎えた東京フィルメックスとの共催により、12本の作品を上映した。作品選定では、「怪談映画の巨匠」という中川監督への画一的なイメージを崩す多彩な作品を選び、上映機会の少ない児童映画や歌謡映画、文芸映画、仁侠映画なども紹介した。上映に際しては、フィルムセンター所蔵のポスターや遺族より提供のあった中川監督の貴重な遺品を会場ホワイエで展示したほか、2回実施したトークショーでは、『東海道四谷怪談』などの主演女優若杉嘉津子氏及び中川監督の助手だった鈴木健介氏(11月20日)、現代日本映画を代表する監督黒沢清氏及び俳優西島秀俊氏を招き(11月25日)、中川監督の人となりの紹介や作品分析を行った。また、すべての上映フィルムに英語字幕を付すこの企画の方針は、来日した海外の映画上映関係者による鑑賞を通じて、その後の中川作品の海外映画祭への出品へと結びついている。
10. 講演会等 若杉嘉津子氏(俳優)・鈴木健介氏(監督)によるトークショー(11月20日)、黒沢清氏(監督)・西島秀俊氏(俳優)によるトークショー(11月25日)
11. 広報
・チラシ制作・配布、新聞・雑誌等への働きかけなどの広報業務は共催団体が担当した。
・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
12. 上映会関連新聞・雑誌記事等
日本経済新聞(2005年9月7日)「Jホラーの原点、英語字幕付きで特集上映」
産経新聞(2005年9月15日)「ジャパニーズホラー傑作選」
日本経済新聞社(2005年11月14日)「映画祭 東京フィルメックス」
しんぶん赤旗(2005年11月16日)「生誕100年 映画監督中川信夫の世界」(映画監督)
中央公論(2005年12月号)「生誕百年 映画監督 中川信夫」(岡田秀則)
映像新聞(2006年1月2日)「中川信夫監督作品を特集」(中川洋吉)
Web掲載:6件
13. アンケート調査
調査期間 平成17年11月19日～平成17年11月27日(8日間)
調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 332件(母集団3,435件)有効回答数271件
アンケート結果 ・良い84.1%(228件)・普通11.8%(32件)・悪い4.1%(11件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

東京フィルメックスとの共同開催は3回目となったが、若い観客層を持ち、海外の映画上映関係者も多数来訪するこ

の映画祭との共催は、幅広い層への映画文化の普及を目指すフィルムセンターにとって引き続き大きな意味を持っており、平成17年度も、作品がまとめて上映される機会の少ない職人的監督・中川信夫を紹介する場として有効に機能した。新しい映画ファンのみならず熱心な愛好者にとっても興味を持ちうる内容となるよう、作品選定に当たっては、「怪談映画の巨匠」という中川監督への画一的なイメージを崩す多彩な作品を上映するよう工夫した。2回のトークショー、資料の展示も、中川監督の世界をより深く理解させるものとして好評を得た。さらに、すべての上映フィルムに英語字幕を付す本企画の方針は、東京フィルメックスの握る国際的な情報網の助けを得てその後の海外映画祭への出品へと結びつき、同じプリントがベルリン国際映画祭(2006年2月9日～19日)、香港国際映画祭(同年4月4日～19日)などで上映されるなど、海外展開に確実に繋がっており、フィルムセンター所蔵フィルムの活用にも資するものとなった。

【見直し又は改善を要する点】

若い観客層の獲得という意味では平均的な企画上映における若年層比率を上回っており、その意味では成功を収めているが、全体としては目標入館者数にわずかに届かなかった。今後は共催団体との協議のもと、企画作りや広報戦略について再検討を行う。また平成17年度の入場料(一般)を、昨年度の500円より高い800円と設定したことも入館者数に影響した可能性がある。入場料については、とりわけ慎重を期して決定したい。

展覧会「展覧会 映画遺産」展(併設:尾上松之助と時代劇スターの系譜」展 / 「ポーランドの映画ポスター」展 / 「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展)

方 針

本展覧会はフィルムセンターにおける常設展示にあたり、フィルムセンターが収集してきたコレクションの中から特に珍しい初期の映画機械や映画人の遺品などを集め展示する一方、過去に行われた映画の発見・復元の成果を紹介しながら日本における映画保存運動の軌跡を振り返ることを目指している。

そのため、資料の公開と保存のバランスを保ちながら、これらを分かりやすく提示、解説することが必要であるが、平成17年度は、映像展示のデジタル化ならびに超指向性スピーカーの導入を行うことで、鑑賞環境の改善を図る。

実 績

1. 開催期間 各企画展示に併設(平成17年4月5日～平成18年3月26日(延べ263日間))
2. 会 場 各企画展示に併設(東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室)
3. 共 催 等 協力:(協)日本映画撮影監督協会、(社)日本映画製作者連盟、(社)日本映画テレビ技術協会、(株)エコー、松竹(株)、角川ヘラルド映画(株)、東映(株)、東宝(株)、日活(株)、虫プロダクション(株)
4. 出品点数 198件
5. 入館者数・入場料金・入場料収入 各企画展示に含まれる
6. 担当した研究員数 1人
7. 展覧会の内容
我が国の映画史を草創期から5つのコーナーでたどりつつ、各時代の中から散逸を免れ現存する資料を展示するとともに、フィルムセンターが発掘、復元してきた映画の一部などの映像展示を計22のディスプレイで行った。
8. 講演会等
・「こども映画館」で小・中学生向けのガイドツアーを開催(2回)
・日本橋活性化フォーラム 日本橋めぐりの会「日本橋老舗リレーツアー」に協力(展示室にてガイドツアーを開催)
9. 広報
・印刷物(美術館及びフィルムセンター概要)の各美術館・生涯学習施設等への配布
・ホームページでの働きかけ。
10. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
河北新聞(2005年9月28日)「日本映画の歩み紹介」
東京メトロニュース(2005年10月号)「明治期の映画館跡地に建つ国内唯一の国立映画機関」
東京スタイル(2005年11-12月号)「東京国立近代美術館フィルムセンター」
大江戸リビング(2005年秋号)「映画好きなら絶対に足を運びたい日本で唯一の国立映画機関」
ほけん東京(2005年8月20日)「懐かしの映画文化を肌で感じてみませんか」
三井グラフ(2005年7-9月号)「東京国立近代美術館フィルムセンター」
11. アンケート調査 各企画展示において実施

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

本展は、初期の映画機械や映画人の遺品などフィルムセンターのコレクションに、いつでも間近に接することのできる環境を整備し、我が国の映画史と映画の散逸の歴史、保存運動の軌跡について啓蒙を行うことを目的としている。このためには、ポスターなどのペーパー・コレクションから機材、展示映像まで多数かつ多様な資料を整理し、わかりやすく提示することが必要である。その一環として、平成17年度は展示映像のデジタル化と、超指向性スピーカーの導入を行った。前者では、これまでブラウン管のディスプレイとVHSテープを使用していたが、液晶ディスプレイとデジタルメディアに交換し、省スペース化、クオリティの向上、テープの劣化に伴う頻繁な交換作業の省力化を実現した。後者は、同じ会場内に22台もの展示映像が設置されていることから生じる、音声の聞きづらさを解消するものである。

【見直し又は改善を要する点】

コレクションの公開率を高める一方、資料の保存環境を考慮する必要があり、とくにポスターのようなグラフィックなコレクションについてはレプリカの作成を検討する必要がある。

展覧会「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)

方 針

平成17年は我が国最古の映画スター、尾上松之助(1875 - 1926)の生誕130周年に当たる。本展は、生涯の出演作品が1,000本を超えたとも言われる尾上松之助の偉大な業績を、現存する資料の展示を通して顕彰するものである。

実 績

1. 開催期間 平成17年4月5日～平成17年10月9日(155日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室
3. 共 催 等 協力:京都府京都文化博物館、立命館大学アート・リサーチセンター
4. 出品点数 79件
5. 入館者数 5,181人(目標入館者数 7,000人)
6. 入場料金 個人ノ一般200円、大学生・シニア70円、高校生40円、小・中学生無料
団体ノ一般100円、大学生・シニア40円、高校生20円、小・中学生無料
7. 入場料収入 412,120円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
展示品はフィルムセンターが所蔵する当時の映画ポスターやチラシ、双六など(「みそのコレクション」)に、京都文化博物館が所蔵する松之助の遺品、高津商会に現存する小道具の刀などを加えた。さらに、関連の映像や珍しい本人の肉声、等身大のパネルなどを通して伝説と謎に包まれた日本映画のパイオニアとしての松之助の実像にも目を向けた。同時に、大河内傳次郎や阪東妻三郎ら、ポスト松之助の時代を築いた昭和の剣戟スターにも焦点を合わせ、時代劇映画の系譜を俯瞰した。
10. 講演会等 実施回数計6回(年度計画記載回数:講演会1回)、参加人数計690人
・「尾上松之助生誕130周年記念講演・特別上映会」(平成17年9月10日、大ホール)
・ギャラリートーク5回
11. 広報 印刷物(ポスター1,000枚、チラシ35,000枚)の各美術館・生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
下野新聞(2005年5月9日)「貴重な資料で回顧」
週刊金曜日(2005年5月13日)「尾上松之助と時代劇スターの系譜」
千葉日報(2005年5月14日)「貴重な資料で回顧」
新潟日報(2005年5月16日)「銀幕の名優 資料で回顧」
茨城新聞(2005年5月19日)「時代劇スターを回顧」
上毛新聞(2005年5月31日)「剣劇映画の大スターたち」
東京新聞(2005年7月1日)「生誕130年 再び脚光」(宮崎美紀子)
日本経済新聞(2005年9月5日)「公演 上映 尾上松之助 生誕130周年記念」
月刊展覧会ガイド(2005年9月号)「尾上松之助と時代劇スターの系譜」
『映像学』75(日本映像学会、平成17年11月)「最古の映画スターをめぐるイベント」(入江良郎)
Web掲載:6件
13. アンケート調査
調査期間 平成17年5月17日～平成17年5月22日(6日間)
平成17年7月12日～平成17年7月17日(6日間)
平成17年8月16日～平成17年8月18日(3日間)
平成17年10月6日～平成17年10月9日(4日間)
調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 74件(母集団5,181件)有効回答数70件

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

1,000本にもものぼるといわれる尾上松之助の出演映画のうち現存しているフィルムは5、6本に過ぎず、再評価も遅れている。このような自国映画史上のパイオニアに光を当て続ける努力は国立研究機関にとって重要な役割であると考えられる。松之助が着用した鎧や映画で使用された小道具など、(鑑賞のための)フィルムとも(調査のための)ドキュメントとも異なる実物資料の所在調査は映画の分野では未開拓な領域であり、その小さな一歩を印すことができた。

入館者数には反省点を残すが、学生を中心に20代以下の観覧者の割合が15%(785人)を占めており、最も多くの若者を集めた展覧会であった(「ポーランドの映画ポスター」11%(242人)、「松竹と映画」4.5%(137人))。

なお、連動企画として「尾上松之助生誕130周年記念講演・特別上映会」を開催し、現存するフィルムの上映や若い研究者たちの新たな視点による講演会を通して、松之助の業績をより深く検証することができた。ギャラリートークを外部の研究者に依頼したのも初めての試みであり、より多彩な視点から松之助映画の魅力を紹介することができた。

【見直し又は改善を要する点】

映画資料の調査、講演会を通し映画史研究の先端を紹介することができたが、観覧者の動員数には反省点を残した。(鑑賞のための)フィルムとも(調査のための)ドキュメントとも異なる実物資料の調査は開始されてからまだ日が浅いため、より長期的な展望で継続していく必要がある。

展覧会「ポーランドの映画ポスター」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)

方 針

戦後ポーランドのポスターは、グラフィック・デザインの世界で国際的にも高い評価を確立しているが、その中にひととき大きな位置を占めているのが映画ポスターである。小ホールの企画上映「ポーランド映画、昨日と今日」に続いて開催された本展は、1972年の「ポーランド映画の回顧」以来数次にわたる特集上映を機にポーランドから譲渡された映画ポスターの中から50点を精選して紹介するものである。

実 績

1. 開催期間 平成17年10月28日～平成17年12月25日(45日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室
3. 共 催 等 なし
4. 出品点数 50件
5. 入館者数 2,199人(目標入館者数 1,500人/当初計画なし)
6. 入場料金 個人ノ一般200円、大学生・シニア70円、高校生40円、小・中学生無料
団体ノ一般100円、大学生・シニア40円、高校生20円、小・中学生無料
7. 入場料収入 187,290円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
『約束の土地』(1974)や『罪の物語』(1976)など著名なポーランド映画のポスターはもちろん、60年代から70年代にかけて輸出された日本映画のポスターが多く含まれていることもフィルムセンターのコレクションの特徴である。それらは『ゴジラ』シリーズや『砂の器』(1974)、『新幹線大爆破』(1975)など馴染み深い作品が意外性にあふれるデザインで描かれているのが特色であり、本展では、ポーランド映画のポスターとともにそういったポーランドで制作された日本映画のポスターも紹介した。
10. 講演会等 実施回数計2回(年度計画記載回数:)、参加人数計72人
・ギャラリートーク2回
11. 広報
・印刷物(ポスター1,000枚、チラシ25,000枚)の各美術館・生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ、NFCメールマガジン(個人会員向け)での働きかけ。
・ポーランド・東欧研究者、美術雑誌への情報提供。美術系書店へのチラシ配布。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
産経新聞(2005年11月1日)「“大国”ポーランドの底力」(堀晃和)
TOKYO HEADLINE(Vol.233)(2005年12月5日)「ポーランドのポスター展」
NYLON JAPAN(2005年12月)「あの『ゴジラ』のおしゃれに」
芸術新潮(2006年1月号)「日本映画を脱構築」
トーキングヘッズ(25)「ポーランドの映画のポスター展」(S)
Web掲載:18件
13. アンケート調査
調査期間 平成17年11月12日～平成17年11月18日(6日間)
平成17年12月20日～平成17年12月25日(6日間)
調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 56件(母集団2,199件)有効回答数56件
アンケート結果 ・良い80.4%(45件)・普通19.6%(11件)・悪い0.0%(0件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
通常の映画展覧会が文学館的な資料展示に傾いているのに対し、本展では美術館的な作品展示を試み、展示品のグラフィック・デザインとしての価値を強調した。チラシ、ポスターなどの宣伝素材から会場レイアウトまで全面にわたり、説

明的な効果よりも美的な効果を優先させた。その結果、尾上松之助展に次いで20代以下の入館者数割合が多く、アンケート調査でも若い層からの好意的な反響が多く寄せられた。具体的には、アンケートの全回答中20代以下の回答が45%を占め(「尾上松之助と時代劇スターの系譜」14%、「松竹と映画」15%)、そのうち88%が「良い」と回答した(「尾上松之助と時代劇スターの系譜」73%、「松竹と映画」75%)。

【見直し又は改善を要する点】

特にグラフィック・デザインの展覧会であったこともあり、カタログの刊行を希望する声が多かったが、著作権の処理手続きなどの関係で困難であった。

展覧会「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展(併設:「展覧会 映画遺産」展)

方 針

明治28(1895)年12月に創業した松竹が「松竹キネマ合名社」の設立によって映画界に進出したのは大正9(1920)年のことである。本展は、我が国の演劇、映画史に大きな足跡を残す松竹の創業110周年を記念して、資料や関連の映像で同社と映画の歩みをたどることを目指す。

実 績

1. 開催期間 平成18年1月13日～平成18年3月26日(63日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室
3. 共 催 等 協力:松竹株式会社
4. 出品点数 140件
5. 入館者数 3,042人(目標入館者数 3,000人/当初計画5,500人)
6. 入場料金 個人/一般200円、大学生・シニア70円、高校生40円、小・中学生無料
団体/一般100円、大学生・シニア40円、高校生20円、小・中学生無料
7. 入場料収入 262,900円
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
日本映画初のスター女優、栗島すみ子がデビューした『虞美人草』(1921)の幻の断片映像や『マダムと女房』(1931)を生んだ土橋兄弟によるトーキー録音機から、近年の『男はつらいよ』シリーズや『たそがれ清兵衛』(2002)で使われた衣裳小道具まで、松竹や関連機関に現存する資料を集め、常に時代の先端で観客を魅了してきた「松竹映画」独自の世界を展観した。
10. 講演会等 実施回数計2回(年度計画記載回数:)、参加人数計53人
・ギャラリートーク2回
11. 広報
・印刷物(ポスター1,000枚、チラシ35,000枚)の各美術館・生涯学習施設等への配布、プレスリリースの発送による新聞・雑誌等への働きかけ。
・ホームページ及びメールマガジン
・日本の伝統文化紹介雑誌、美術館・博物館紹介雑誌への情報提供。美術館・博物館へのチラシ配布。松竹株式会社を通じた広報。
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
全私学新聞(2006年1月23日)「松竹創業110周年 松竹と映画」
産経新聞(2006年1月25日)「松竹創業110周年記念 松竹と映画」
月刊おとなりさん(2006年2月号)「展覧会 松竹と映画開催」
月刊H(2006年2月号)「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展
日経WOMAN(2006年3月号)「松竹創業110周年 松竹と映画」
和のしつらいを楽しむ(2006年3月20日発売)「松竹創立110周年記念 松竹と映画」
Web掲載:4件
13. アンケート調査
調査期間 平成18年3月21日～平成18年3月26日(6日間)
調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 26件(母集団3,042件)有効回答数25件
アンケート結果 ・良い84.0%(21件)・普通12.0%(3件)・悪い4.0%(1件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当初予定された松竹との共催は実現できなかったが、松竹の協力を得つつ、フィルムセンター独自のネットワークを活用しながら、同種機関はもとより文学館や個人記念館などのコレクション調査、借用をスムーズに行い、短期間のうちに多彩な展示品を集めることができた。歴史的な遺産のみならず、近年の人気作品で使用された衣裳や小道具も出品して、観

覧者の多様な関心に配慮した。

【見直し又は改善を要する点】

創業から数えて110年、映画界の参入から数えても85年におよぶ松竹の歴史と比較すれば、より大規模な展覧会が開かれてもよいところであるが、松竹との共催が実現しなかったこと、また、これに伴う年間計画の変更によって、準備期間が正味3ヶ月しか確保できなかったため、縮小化を計らざるを得なかった。

特別展示「『浮雲』再現セット」

方 針

企画上映「生誕百年特集 映画監督 成瀬巳喜男」の開催にあわせ、7階展示室ロビーで『浮雲』（東宝、1955）再現セットの特別展示を行った。

実 績

1. 開催期間 平成17年8月20日～平成17年12月25日(104日間)
2. 会 場 東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室ロビー
3. 共 催 等 協力：世田谷文学館、日本映画・テレビ照明協会、東宝スタジオ、東宝スタジオサービス、多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科、日本デザイナー学院、ライトシップ/大久保賢一、宮武嘉昭、矢内京子、竹内悦子
4. 出品点数 『浮雲』再現セット 1件
5. 入館者数 4,764人(目標入館者数 設定なし/当初計画なし)
6. 入場料金 無料
7. 入場料収入 なし
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
本セットは、成瀬作品『浮雲』で中古智美術監督の助手を務めた竹中和雄氏が当時のスケッチや図面を参考に、ゆき子(高峰秀子)の部屋を再現したものである。もとは世田谷文学館の「生誕100年 映画監督・成瀬巳喜男」展(2005年1月29日～4月10日)のために組まれたものを、あらためてフィルムセンターの施設に合わせ再生・移築した。会場では、やはり『浮雲』で照明助手を務めた小嶋眞二氏が照明機材の展示を手がけ当時のセット撮影の雰囲気再現したほか、セットの解体搬出作業などの記録映像を放映して映画美術という仕事の一端を紹介した。
10. 講演会等 なし
11. 広報
・館内掲示
・ホームページ及びメールマガジン
・日本映画・テレビ美術監督協会ホームページでの告知
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等
産経新聞(2005年9月29日)「名作支えた『美術』の存在」(堀晃和)
朝日新聞(2005年10月14日)「成瀬映画『浮雲』セットを復元」(斉藤勝寿)
13. アンケート調査
調査期間 平成17年8月16日～平成17年8月18日(3日間)
平成17年10月4日～平成17年10月9日(6日間)
平成17年11月12日～平成17年11月18日(6日間)
平成17年12月20日～平成17年12月25日(6日間)
調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。
アンケート回収数 88件(母集団4,764件)有効回答数87件
アンケート結果 ・良い79.3%(69件)・普通18.4%(16件)・悪い2.3%(2件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
世田谷文学館の展覧会に合わせて組まれたセットを再利用することにより、コストを最小限に抑えつつ成果を上げることができた。同時に、2館で独立していた成瀬巳喜男関連企画がセットの展示を通して連携することとなり、同監督の「生誕百年」を強く印象づけることができた。なお、同セットは世田谷文学館での会期終了後解体される予定であったが、フィルムセンターでの公開を機にセットの再利用を希望する声が大学や博物館施設から寄せられ、長期の保存に寄与した。

【見直し又は改善を要する点】
来館者の理解を助けるため、ゆき子の部屋が登場する『浮雲』のシークエンス(動画)を会場内で流すことが理想的であったが、スケジュールの都合上、映画会社との権利的な交渉などまでは実現できなかった。

優秀映画鑑賞推進事業

方 針

「優秀映画鑑賞推進事業」は、文化庁とフィルムセンターが日本映画製作者連盟、全国興行環境衛生同業組合連合会などの協力のもと、全国各地の公立文化施設などと共同して、優れた日本映画の良質な35mmプリントを提供する巡回上映事業である。この上映を機会に、各地で開催されている映画祭や恒常的な上映会の取り組みがより発展し、スクリーンを通して映画を鑑賞する習慣が定着していくことを目指すものである。

実 績

1. 開催期間	平成17年7月2日から平成18年3月13日までの間
2. 会 場	広島県、鹿児島県を除く全国45都道府県の181会場
3. 主 催	文化庁、東京国立近代美術館フィルムセンター
協 力	社団法人日本映画製作者連盟、全国興行生活衛生同業組合連合会
そ の 他	各開催会場において協力等の団体あり
4. 出品点数	22プログラム(各4作品、計88作品)
5. 入館者数	入館者数計86,753人
6. 入場料金	成人1人1回500円以内
7. 入場料収入	- 円
8. 担当した研究員数	2人
9. 展覧会の内容	平成17年度の上映作品は、日本映画史上に残る名作、監督や年代を代表する作品、大きな話題となった娯楽作品など、1プログラム4作品、全22プログラム88本と過去最高の構成とした。プログラム内容については、文化庁による「子どもの映画鑑賞支援事業」の実施に伴い、親子プログラムという枠をはずすと同時に、実施を希望する公立文化施設等がプログラムを選びやすいように、より明確に監督別、年代別、ジャンル別などで作品をまとめる工夫をした。また、アンケートは全会場同一のもので集計することにした。
10. 広報	各実施会場で実施
11. アンケート調査	調査期間 平成17年7月2日～平成18年3月13日 調査方法 アンケート用紙を配布し、集計されたものを各会場より回収する アンケート回収数 17,916件(母集団86,753件)有効回答数15,309件 アンケート結果 ・良い91.1%(13,940件)・普通6.8%(1,050件)・悪い2.1%(319件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
観客層は60歳代を中心に中高年者が多く、上映される番組は、主に日本映画の古典的な名作や大ヒット作品が選ばれる傾向が強い。ただし、近年は映画祭や定期的な上映活動の一環として、特色のある作品を選んだり、地元ゆかりのある作品や映画人を顕彰したりする例も増えている。親子プログラムに対しては例年どおり、スクリーンで映画を見る楽しさを実感したという感想が多く寄せられた。
17回目となる平成17年度は、広島、鹿児島の2県において開催がなかったため、全国45都道府県で実施したが、会場数は昨年度より13会場増の全国181会場(内新規31会場)での実施となり、会場数は過去最高を記録した。なお、2件が中止となった(島根県出雲市:地元映画館との調整不良のため/大分県別府市:指定管理者制度導入により主催団体の変更が生じたため)。また、プログラムをより選びやすく再編成したことにより、各会場からの希望及び実施した数にこれまで以上の格差が生まれ、1プログラムは実施を見送ることにした。期間中の入館者数は総計で86,753人にのぼり、過去最高を記録した。
本事業に使用するプリントは巡回用のため、その損傷も激しいことから、事業実施期間外及び年末年始におけるプリントの十分なチェックと安全保護をより確実にを行うために、フィルムセンターにおけるプリントの搬出入と検品を相模原分館で行うことにより、その態勢を安定、強化した。
【見直し又は改善を要する点】

当事業の現行の巡回システムでは、プリントがフィルムセンターのチェックを経ないまま長期間会場を移動することに加え、新規実施会場にはフィルムの扱いに不慣れなところもあるため、プリントに断裂が生じるなど、上映に支障を生じるトラブルが起きる可能性がある。また、事業への取り組み方、映画会社や地元の映画館との関係などにより、実施会場にかなりの偏りが生じている。そのため、来年度は、文化庁の「日本映画・映像」振興プランによる上映支援事業などの進展を見すえつつ、優れた日本映画の広範な普及と良質なプリントの提供を常に両立できるようなフィルム貸与制度の研究を進める一方、当事業の実務については外部委託を検討し、事業全体の見直しを進めていきたい。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

貸与・特別観覧の件数

(1) 映画フィルム

貸与	45件(227本)(内共催事業によるもの4件82本)
特別映写観覧	95件(232本)
複製利用	36件(59本)

(2) 映画関連資料

貸与	7件(57点)
特別観覧	47件(291点)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

(1) 映画フィルム

国内外の主要映画祭やFIAF加盟機関などを対象に、主に映画保存活動の啓発を目的として行われる所蔵フィルムの貸与は、ニューヨーク近代美術館における日本映画名作選(52本)、ボルデノーネ無声映画祭における日本映画特集(22本)、コミュニティシネマ支援センターによる成瀬巳喜男監督作品巡回事業(4本を2回)の共催事業における館外上映を含め45件、その貸出フィルム数は227本に上り、昨年度に比べ113本増と大幅に増加した。共催事業以外では、国外では、パシフィック・フィルム・アーカイブ(21本)、シネマテーク・フランセーズ(22本)、台湾国家電影資料館(12本)で行われた日本映画の特集にフィルムを貸与するとともに、メルボルン、ヴェネツィア、ニューヨークなど主要な映画祭での日本映画特集に貸与を行った。国内ではFIAF機関である福岡市総合図書館ならびに山形国際ドキュメンタリー映画祭、東京日仏学院、横浜美術館などの企画上映にフィルムを貸与した。また、昨年度に続き、文化庁主催による韓国ソウルでの日本映画上映にも4本の貸与を行った。

大学等の教育機関や研究機関、映画やテレビの制作会社、日本映像職能連合の加盟団体、出版社などの組織を対象に行われている特別映写観覧は、95件を実施し、232本を上映した。また、テレビ番組の制作会社や著作権を持つ映画会社などに対し所蔵フィルムからの複製を認める複製利用は、件数として36件、フィルム本数としては59本であった。

(2) 映画関連資料

映画関連資料については貸与、出版物等への図版提供を以下のとおり行い、映画の専門分野のみならず人物の顕彰や地域振興も含め幅広い出版・行事に貢献した。

展示施設等を対象とする貸与では、衆議院事務局憲政記念館で開催された「明治の外交と議会政治特別展 日口講和100年」や杉並アニメーションミュージアムの「日本のアニメをつくった20人」特別展、姫路文学館の「はりま・シネマの夢 銀幕を彩る映画人たち」、東京オペラシティアートギャラリーの「武満徹 Visions in Time」など7つの展覧会に対し、映画ポスターや撮影台本を中心とする関係資料計57点の貸与を行った。

出版や放送などに対しては海外からの申請4件を含む計47件の申請に対し、291点の図版提供や撮影の許可を行った(上映用フィルム貸与に伴う写真図版の提供を除き、資料複写5件126点を含む)。これらには雑誌復刻への原本提供や、映画会社による自社保存用スチル写真素材の作成、大学による大規模な資料の熟覧などが含まれている。

【見直し又は改善を要する点】

(1) 映画フィルム

映画フィルムの貸与及び複製利用は、他に保存する同一作品フィルムがあるなど損傷等のリスクを許容し得るフィルムについて行うことが前提だが、著作権者が不明な場合や、著作権者によっては許諾手続きが複雑な場合があり、結果として承諾を受けるのに相当時間を要することがある。今後とも著作権者との間でより迅速な許諾手続きについて検討を重ねていく必要がある。

(2)映画関連資料

昨年度同様、貸与や特別観覧による資料の公開に当たっては、権利関係に問題が生じないよう慎重な対応が必要であるが、映画に関わる資料については様々な著作権法上の解釈があり、明確なルールが確立されていない。それが、コレクションの積極的な活用の足かせになっており、業務の定型化による効率化を難しくしている。

また、事務手続きの簡略化についても、引き続き検討していきたい。

*添付資料

貸与件数の推移（事業実績統計表 p.8）

特別観覧件数の推移（事業実績統計表 p.9）

3. 調査研究

中期計画

- (1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。
- 1 収蔵品に関する調査研究
 - 2 美術作品に関する調査研究
 - 3 収集・保管・展示に関する調査研究
 - 4 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
 - 5 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等
- (1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。
- (2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実績

1. 調査研究

- (1) 収蔵品の調査研究
- ・日本のニュース映画の調査研究
- (2) 展覧会のための調査研究
- ・稲垣浩監督に関する調査研究
 - ・豊田四郎監督に関する調査研究
 - ・国内外で発掘される映画作品の背景に関する調査研究
 - ・成瀬巳喜男監督に関する調査研究
 - ・ポーランド映画史と現代ポーランド映画に関する調査研究
 - ・斎藤寅二郎監督と野村浩将監督に関する調査研究
 - ・中川信夫監督に関する調査研究
 - ・兪賢穆監督と韓国映画史に関する調査研究
 - ・ドイツ映画史とオーストリア映画史に関する調査研究
 - ・児童・生徒向けの映画教育に関する調査研究
 - ・俳優尾上松之助に関する調査研究
 - ・ポーランドの映画ポスターに関する調査研究
 - ・松竹の歴史とその映画資料に関する調査研究
 - ・松竹映画に関する調査研究
- (3) 保存・修理に関する調査研究
- ・国内の同種機関、研究機関との提携による映画フィルムの保存と修復に関する調査研究
 - ・アジア諸国の映画保存、アーカイブについての調査研究
 - ・染色フィルムの修復に関する調査研究
 - ・デジタル技術を用いた映画フィルムの修復に関する調査研究
 - ・ナイトレート・フィルムの保存と修復に関する調査研究
 - ・1920年代から30年代のドイツ・オーストリア映画の保存と修復に関する調査研究
- (4) 研究活動の活用等
- フィルムセンターの調査研究の成果は、隔月で発行している「NFCニューズレター」に掲載した。NFCニューズレターは、大学等の研究機関、図書館等の団体と映画研究者や評論家等の約700件に配布し、研究者等の参考に資している。
- (5) 特別映写観覧等による外部への研究協力
- 大学等の映画に関する研究・教育等及び映画製作等のための調査への協力の一つとして特別映写観覧の機

会を提供している件数は95件、作品数は232本で、昨年度に比べ件数は5件、作品数は37本の増加を示した。この制度を活用して、平成17年度は昨年度に引き続き、東京藝術大学の映像・舞台芸術実験授業、NPO法人映画美学が主催する映画上映専門家養成講座の上映講義、明治学院大学文学部芸術学科の授業、京都造形芸術大学通信教育部の授業への協力を継続するとともに、新たに文化庁が主催する芸術系大学・学部学生を対象とした特別講義に対し、定期的な協力を行った。また、一橋大学、名古屋大学、東北大学、千葉大学、お茶の水女子大学などの映画等研究者にも、論文執筆や研究発表の一助として、特別映写観覧の機会を提供した。その他、協同組合日本映画撮影監督協会、社団法人映像文化製作者連盟、NPO法人日本映画映像文化振興センター等映画関連団体の研修への協力や、日本放送協会、讀賣テレビ放送、日活などによる映画・映像作品の製作に際し、映画・テレビ制作会社等への協力を行った。

2. 客員研究員等の招聘実績(年度計画記載人数: 4人)

(1) 所蔵映画フィルムなどの総合的なデータ分析とカタログ及び目録作成

客員研究員氏名: 北小路隆志(評論家)

研究内容: 戦前期の所蔵日本ニュース映画の目録作成のために、各プリント内容の調査研究、データの集積及び必要に応じて不足データの補充と、データベースとして全体の統一を図るための調査研究。

客員研究員氏名: 紙屋牧子(映画研究者)

研究内容: 所蔵日本文化・記録映画の目録作成に向けて、データ化のための分析、データ収集、不足分データの補充のための調査研究。

(2) 展示企画に関わる資料の調査

客員研究員氏名: 田中眞澄(映画史家)

研究内容: 展示企画「松竹創業110周年記念 松竹と映画」及び来年度実施予定の展示企画の開催のため、映画史・近代文化史に関わる資料の調査・分析及び企画立案に関連する研究。

(3) 外国映画に関する事業等の企画の共同研究

客員研究員氏名: 溝口彰子(フリー翻訳者)

研究内容: 来年度に実施する上映事業にかかわる調査、及びFIAF加盟の同種機関との映画史的、アーカイブ的な事例に関する調査等。

3. 調査研究費 予算額 45,482,079円 決算額 51,061,148円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

「発掘された映画たち2005」の実施に関する調査研究においては、褪色したフィルムをデジタル復元する研究を行ったほか、近年発見されたフィルムのなかでタイトルや製作年が不明だったものを文献調査などによって同定することができた。さらに、上映作品『銀輪』を監督した松本俊夫氏から製作過程の情報提供を得ることができた。

「韓国リアリズム映画の開拓者 兪賢穆監督特集」の実施に関する調査研究については、韓国映像資料院で事前調査を行うと共に、兪監督本人にインタビューを行うことで企画開催に必要な情報を収集した。

その他、群馬県総務局地域創造課と群馬県教育委員会義務教育課が全国に先駆けて主催する、群馬県の公立小学校における映像教育の実践を視察することによって、映画教育に関する最新の知見を得ることができた。

「尾上松之助と時代劇スターの系譜」と「ポーランドの映画ポスター」展の実施に関する調査研究においては、ギャラリートークの一部を外部の研究者に依頼することによって、より幅広い専門知識を得ることができたと同時に、研究者相互の交流が活発化する結果となった。

福岡市総合図書館映像資料課との共同作業により、長篇アニメーション『バグダッド姫』(1948)の「最良版」を作成するというフィルム・アーカイブ同士の共同研究も積極的に実施した。

近年、国内の大学やその他の団体が映画研究のために施設見学及び特別映写観覧を利用することが多くなってきており、その結果、国内外の研究者間の情報交換や交流が今後の映画研究に役立つ結果となっている。

また、映画・映像制作会社が、テレビ・DVD等において所蔵フィルムを複製利用することを前提に、調査研究のために特別映写観覧を行うことが増加している。これにより、提供するフィルム数が大きな伸びを示すとともに、所蔵フィルムの資料的、芸術的価値を生かしたテレビ番組等の製作に協力することができた。

【見直し又は改善を要する点】

近年、フィルムセンターの所蔵フィルムを国内外のフィルム・アーカイブや映画祭に貸し出す機会が増加しており、カタログへの執筆協力や所蔵フィルムについての専門的知識を提供することがますます重要になってきている。今後は、それらの協

力要請に迅速に対応できるよう、日本映画史の研究及びフィルム保存研究をより一層充実させることを検討していく。

* 添付資料

調査研究一覧(事業実績統計表 p.55)

4. 教育普及

中期計画

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方針

1. 資料収集及びレファレンス機能の充実

図書室では、我が国で刊行された映画関係の図書をできる限り収集し、閉架式閲覧サービスを行うとともにコピーサービスを実施する。なお、新刊雑誌や利用度の高い基礎文献・雑誌については開架で閲覧できるスペースを整備する。

2. 映画鑑賞を通じて子どもたちの幅広い人間形成に資することを旨とする。
3. 講演会等の実施
国際映画シンポジウムでは、映画を巡る様々な課題を取り上げることで、映画史研究に新しい視点を提供することを目指し、上映会又はフィルム・アーカイブ活動に因んだ講演会等の実施により、広く映画に関する理解を深める。
4. 博物館実習等を行うことにより、将来の映画研究者等を育成する。
大学生を対象とした博物館実習や、主に大学院生を対象としたインターンシップ制度を実施することにより、映画文化に関心をもつ人材の専門的知識の向上と職業意識の育成を行う。
5. 次の発行事業を実施し、広報活動の充実を図る。
・「優秀映画鑑賞推進事業」鑑賞の手引きの発行
・展示室での展示企画のチラシ
・展示室での展示作品の出品リスト
・講演会チラシ
・「NFCニューズレター」の発行 隔月刊 6冊
・企画上映のための「NFCカレンダー」を発行 企画毎発行
・「こども映画館」チラシ
6. ホームページを活用し、フィルムセンターの概要、企画上映を含む活動一般などの情報の公開に努めるほか、職員及びインターン募集などにも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を図る。
また、ホームページで発信できる情報についての検討を行い、できるものから順次更新を図る。

実績(総括表)

- (1)-1 資料の収集及び公開
収集件数(図書) 1,816冊(平成17年度間)
公開場所(図書) フィルムセンター図書室
利用者数(図書) 3,041人
- (1)-2 広報活動の状況
刊行物による広報活動
ホームページによる広報活動
マスメディアの利用による広報活動
- (1)-3 デジタル化の状況
所蔵映画フィルムについてのデータベース構築のための作品タイトル及び監督等のスタッフ、出演者等のキャストやフィルムの長さ等のデータ等を文字情報としてデジタル化を実施。
- (2)-1 児童生徒を対象とした事業
小・中学生を対象とした「こども映画館」の実施 2回 210人
相模原分館における児童生徒を対象とした上映会 2回 229人
- (2)-2 講演会等の事業
シンポジウム 1回 310人
講演会 1回(3プログラム) 434人
ギャラリートーク 9回 381人
- (3)-1 研修の取組

実績なし

(3)-2 大学等との連携

博物館実習生の受入れを実施。

平成17年度より主に大学院生を対象としたインターンシップ制度を実施。

(3)-3 ボランティアの活用状況

7階展示室での映画の歴史等の解説やこども向け上映会での解説へのボランティア等との連携協力を検討した。

(4) 渉外活動

昨年度に引き続き「こども映画館」へ参加したこどもたちへの記念品の提供について企業から協力を受けて実施した。また、展示映像の著作権者として映画製作者からの協力を受けた。

(5) 教育普及経費 予算額 58,018,461円 決算額 50,001,052円

(6) その他

博物館実習生の受入等の教育普及事業を実施した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成17年度の「こども映画館」では、上映企画と展示企画を連動させた昨年度からの新形式を発展させ、参加申込制による本格的な「映画教育プログラム」となった。このことは、今後の児童・生徒向け企画の活性化を促すとともに、全国的な「映画教育」の機運の高まりを先導する映画鑑賞教育事業のモデルケースとなっている。講演会などの事業では、上映・展示企画に密接に関連したシンポジウム・講演会をそれぞれ実施し、各企画内容の深い理解に資することができた。また、広報面では、雑誌などへの企画情報の掲載が大幅に増加し、フィルムセンターの存在感を強めた。

【見直し又は改善を要する点】

映画教育機関の設立が相次いでいる状況に鑑み、「映画製作専門家養成講座」は昨年度の第8回をもって見直しとなり、平成17年度は実施しなかった。しかし、今後も将来の映画製作を担う学生や若手の映画製作関係者が35mmフィルムで過去の作品を鑑賞するための環境整備は重要であり、平成17年度は教育機関の申し込みによる特別映写観覧のより積極的な受入れという形でそれに対応した。アーカイブとしてのフィルムセンターが新たに人材養成に貢献できる方策は引き続き検討の対象である。また、アーカイブとしてのフィルムセンターらしい研修事業として、映画アーキビストの養成を目指す講座の開講を検討していく。

渉外活動については、平成17年度も一部の企業や映画製作者からの協力を受けたが、より積極的にフィルムセンター業務充実のための企業との連携を目指したい。

* 添付資料 教育普及件数の推移 (事業実績統計表 p.16)

(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実績

1. 収集

件数 1,816件(目標 - 件)

2. 公開

公開場所 フィルムセンター図書室(4階)

公開日数 227日間

公開件数等

・利用者数 3,041人

・公開資料数 26,217件 (和書22,552 / 洋書3,665)

・閉架利用件数 997件

・複写利用数 1,019件 (12,764枚)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成17年度には、ゆまに書房による復刻版の刊行(「日本映画論言説大系 第3期 活動写真の草創期」に対し、駒田好洋「活動写真説明書」など明治、大正期の文献4冊の原本提供を行った。また、新たな試みとしては、「国際映画新聞」及び「昭和十八年 十九年 二十年 映画年鑑」の復刻を、初めてフィルムセンターの監修で行った。前者は無声映画全盛期から戦中にかけて刊行された業界誌であり、刊行が予定されている全284冊のうち、年度内に118冊の提供を行った(刊行はゆまに書房)。後者は戦中未刊行に終わった年鑑の欠落を補うもので、フィルムセンターが所蔵する手書き原稿をそのまま影印・復刻している(日本図書センターより刊行予定)。なお、「映画年鑑」を除く復刻事業には寄贈手続きを終えた「みそのコレクション」を底本とするものが多く含まれている。

【見直し又は改善を要する点】

資料の公開には、図書室での閲覧をはじめ展示やデータベースによる情報化、貸出や図版提供など、一般の来館者へのサービスから出版や放送を通して社会への還元を行うケースまで様々だが、資料の収集・整理・保存、公開、データベースの構築といった業務について、全体のバランスを保ちながらそれぞれの改善を少しずつ進めているのが現状であり、劇的な改善を行うことが難しい。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

(5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。

また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実績

1. 刊行物による広報

(1) NFC ニュースレター

発行年月日 偶数月発行(発行回数6回、発行部数6冊)(年度計画記載発行回数6回)

料金 1部300円

配布先 会場での販売、運営委員等、各都道府県の中央図書館、大学等

(2) NFC カレンダー

(3) 平成17年度優秀映画鑑賞推進事業 鑑賞の手引

(4) 展覧会出品目録・ガイド

「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展出品リスト

「ポーランドの映画ポスター」展出品リスト

「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展出品リスト

(5) 上映スケジュールの発行

フィルムセンター発行

ア.「松竹創業110周年記念 松竹映画探索 1960 - 70年代」

共催者発行

ア.「ポーランド映画、昨日と今日」

イ.「第6回東京フィルメックス 特集上映 生誕百年特集 映画監督 中川信夫 ～地獄のアルチザン～」

(6) 図録

「EARLY AUTUMN : Masterworks of Japanese Cinema from the National Film Center, Tokyo」(「アーリー・オートム 日本映画名作選(フィルムセンター・コレクションより)」)カタログ(執筆・編集)

「日韓友情年2005 韓国リアリズム映画の開拓者 兪賢穆監督特集」カタログ

ポルデノーネ無声映画祭における日本映画特集のカタログ発行への協力

(7) その他の広報印刷物

展示チラシ(3回)

「子ども映画館 2005年の夏休み」(作品解説及び上映スケジュール)

「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展セルフガイド

「国際映画新聞」復刻版(ゆまに書房刊)監修

「特別企画 成瀬巳喜男シンポジウム」チラシ

「尾上松之助 生誕130周年記念講演・特別上映会」チラシ

フィルムセンター紹介パンフレット(12p版)

フィルムセンター紹介パンフレット(4p簡易版)

2. インターネットを用いた広報

平成17年度は、平成15年度に創刊したフィルムセンターの上映・展示企画や刊行物などの最新情報を電子メールで提供する「NFCメールマガジン」の送信先が、年度末の時点で2,500を数えた。これは昨年度を約800上回る数である。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

企画の広報活動としては、上映企画ごとに「NFCカレンダー」を作成すると共に、展示企画、シンポジウム、講演会、及び「こども映画館」のチラシを作成し、それらの情報をフィルムセンターのウェブサイトでも公開した。平成17年度は、企画の内容に応じた情報掲載の依頼先(新聞・雑誌・ラジオ・テレビなど)の分析と配付、掲載媒体のデータ蓄積など、企画の効果的な紹介を増強した。また、フィルムセンターの事業紹介媒体としては、隔月刊の「NFCニューズレター」がある。企画関連の記事から映画保存の最新情報までの幅広いテーマを扱い、映画関係者、研究者などに引き続き広く配布した。「発掘された映画たち2005」では、記者発表会を開催することで事前の広報を積極的に行った。また、研究員がテレビやラジオに出演して各企画やフィルムセンターの活動の解説を行った。

そのほか、修学旅行で東京を訪れる中学生の訪問を積極的に受入れたり、大学で博物館学を受講する学生に対して、研究員がフィルムセンターの役割と事業を解説するなど、将来の映画観客層にフィルムセンターへの理解の促進に努めた。また、「NFCメールマガジン」を12回発行し、購読者は昨年度より増加して2,500名を超えた。

【見直し又は改善を要する点】

企画によっては広報活動の開始時期が遅れる場合があった。その反省を踏まえ、各企画の開始日より可能な限り早い時期から広報活動をはじめることが必要である。また、ホームページにおける各企画の情報提供の充実を図るとともに、広報活動に対する一般利用者の意見の収集に努め、広報活動の一層の充実を努めたい。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
- また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実績

1. 所蔵作品のデジタル化

- (1) 所蔵映画フィルムについてのデータベース構築のための文字情報のデジタル化を実施。

平成17年度にデジタル化したデータ件数 2,008件(目標 - 件)

平成17年度末収蔵作品数 46,458件

平成17年度末デジタル化作品数 46,458件

今後のデジタル化の対応 毎年収集した映画フィルム数をデジタル化予定

- (2) 所蔵映画関連資料についてのデータベース構築のための文字情報のデジタル化を実施。

平成17年度にデジタル化したデータ件数 7,609件(ID付与の作業分を除く)

平成17年度末収蔵資料数 約125,494件(スチル写真及びポスター、撮影台本)

平成17年度末デジタル化資料数 78,116件

今後のデジタル化の対応 新規収蔵資料のデジタル化と既存の資料の遡及登録をともに行う予定

2. ホームページのアクセス件数 (東京国立近代美術館の件数による)

3. デジタル化した情報の公開 あり

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

一昨年度のNFCD(National Film Center Database / 所蔵映画フィルム及び所蔵映画関連資料のデータベース検索システム)開発終了に続き、ホームページ上で所蔵フィルム情報の公開を開始した(「所蔵映画フィルム検索システム」)。

【見直し又は改善を要する点】

文化庁が着手した「日本映画データベース」の構築に関して、フィルムセンター及びNFCDとの連携について検討した。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

1. 小・中学生を対象とした「こども映画館」の実施

2回

参加者数210人

担当した研究員数 2人

2. 相模原分館における小・中学校の児童生徒を対象とした上映会

実施回数 2回(昨年度実績2回)

参加者数 229人(昨年度実績 216人)

担当した研究員数 1人

事業内容

・平成18年2月28日、相模原市立由野台中学校3年生(上映作品『がんばっていきまっしょい』)

・平成18年3月22日、相模原市立由野台中学校2年生(上映作品『がんばっていきまっしょい』)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

将来の映画観客となる小・中学生を主な観客に想定して、こどもたちに映画の面白さ、とりわけ日本映画の素晴らしさを知ってもらい、同時に映像に対する理解力を高め、情操教育にも資するよう企画した「こども映画館 2005年の夏休み」を7月30日と8月6日に開催した。4年目を迎える「こども映画館」は、映画上映を中心とする企画から、楽しみながら映画のしくみや歴史を理解できる総合的教育プログラムへの転換を図り、映画の上映、研究員による解説、映写室案内(抽選制)、フィルムに触れる体験コーナー、展示室案内(ギャラリートーク付)などを実施した。今回初めて事前申込制を採用したが、7月30日の回は定員の151名を上回る応募があった。参加者の多くは親子で参加しており、このことは、夏休みの体験学習を望む家族に本企画が注目されたことを意味している。また、本企画は「小学校低学年向け」と「小学校高学年及び中学生向け」に区分して実施したが、このことによって、こどもたちの理解力に合わせた内容を提供することが可能となった。無声映画の上映時には、映画説明(活弁)と伴奏音楽を導入することで、こどもたちに理解しやすい内容となり、同時に、日本の映画文化を普及する良い機会となった。また、7月21日から9月4日までの間は、「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展に関連して、展示資料についてわかりやすく解説したこども向けのセルフガイド(解説カード)を配付し、8月24日と8月27日にはこども向けのギャラリートークを実施した。

【見直し又は改善を要する点】

初めての試みであったこども向けギャラリートークは、館内での事前告知、開催直前のメールマガジンでの広報活動など

を行ったが、参加者が少なかった。今後は近隣の小学校や公民館など、より広範囲に広報活動を実施したい。

相模原分館におけるこども向け上映会は、学校からの要請に応じて、相模原市教育委員会を窓口として実施している。市内全域の小・中学校への周知は行われているが、相模原分館近隣の小・中学校からの依頼が顕著であり、上映回数は年々減少傾向にある。保護者や学校関係者等からの意見を参考にしながら、子どもの生活に適合したスケジュール作り、学校カリキュラムとの連携などを視野に入れた実施方法を検討していく。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。

それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. シンポジウム

開催日時:平成17年8月20日(土)午後2時から午後6時

(第1部:映画上映(有料) 午後2時~ / 第2部:トーク・セッション(無料) 午後4時半~)

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター大ホール

講師:聞き手=山根貞男(映画評論家)

ゲスト=小谷承靖(映画監督)、福沢康道(撮影監督)、竹中和雄(美術監督)

テーマ:「特別企画 成瀬巳喜男シンポジウム」

2005年に生誕100年を迎えた成瀬巳喜男監督の業績を顕彰するため、成瀬監督の生誕日である8月20日に、関連映画作品(『成瀬巳喜男 記憶の現場』(2005)及び『カメラマン 玉井正夫』(2005))の上映を行い、成瀬作品の製作スタッフであった映画人を招聘して成瀬巳喜男とその作品にまつわるエピソードを語るという形式でのシンポジウムを実施した。

参加人数:310名

(第1部:映画上映310名 / 第2部:トーク・セッション310名) *入れ替え27名

2. 講演会

開催日時:平成17年9月10日(土)午前11時から午後6時40分

(プログラム1:午前11時~ / プログラム2:午後2時~ / プログラム3:午後5時~)

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター大ホール

講師:プログラム1 児玉竜一(日本女子大学文学部助教授)

プログラム2 富田美香(立命館大学文学部助教授)

プログラム3 小松弘(早稲田大学文学学術院教授)

テーマ:「尾上松之助 生誕130周年記念 講演・特別上映会」

プログラム1 「歌舞伎役者としての尾上松之助」

*講演後に『史劇 楠公訣別』『忠臣蔵』『実録 忠臣蔵』を上映

プログラム2 「“目玉の松ちゃん”の功績」

*講演後に『豪傑児雷也』『弥次喜多 善光寺詣りの巻』を上映

プログラム3 「映画俳優 尾上松之助」

*講演後に『渋川伴五郎』を上映(弁士:澤登翠、伴奏:村井音文)

2005年に生誕130周年を迎えた尾上松之助の業績を顕彰するため、9月12日の尾上松之助の生誕日にあ

わせ、現存する松之助主演のフィルムを可能な限り集めて上映するとともに(一部弁士付き)、第一線の研究者たちを講演者として招き、日本最初の映画スターの業績を様々な角度から検証した。

参加人数:434名(延べ)

(プログラム1:120名/プログラム2:159名/プログラム3:155名)

3. ギャラリートーク

(1)「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展

開催回数:5回(平成17年5月21日、6月25日、7月23日、8月27日、9月24日の各土曜日)

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室

講師:1回目:入江良郎(フィルムセンター主任研究官)

2回目:板倉史明(フィルムセンター研究員)

3回目:大矢敦子(立命館大学COE推進機構客員研究員)

4回目:田中眞澄(映画史家・フィルムセンター客員研究員)

5回目:田島良一(日本大学芸術学部教授)

参加人数:計256人(平均51人)

(2)「ポーランドの映画ポスター」展

開催回数:2回(平成17年11月26日、12月24日の各土曜日)

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室

講師:1回目:久山宏一(ポーランド研究者)

2回目:今井良朗(武蔵野美術大学教授)

参加人数:計72人(平均36人)

(3)「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展

開催回数:2回(平成18年2月25日、3月18日の各土曜日)

開催場所:東京国立近代美術館フィルムセンター7階展示室

講師:1回目:田中眞澄(映画史家・フィルムセンター客員研究員)

2回目:田中康義(映画監督)

参加人数:計53人(平均27人)

4. アンケート結果

(1)講演会等

シンポジウム 72件(母集団310件)有効回答数65件

・良い86.2%(56件)・普通12.3%(8件)・悪い1.5%(1件)

講演会 91件(母集団434件)有効回答数73件

・良い83.6%(61件)・普通11.0%(8件)・悪い5.5%(4件)

合計 163件(母集団744件)有効回答数138件

・良い84.8%(117件)・普通11.6%(16件)・悪い3.6%(5件)

(2)ギャラリートーク

「尾上松之助と時代劇スターの系譜」展 42件(母集団256件)有効回答数40件

・良い77.5%(31件)・普通20.0%(8件)・悪い2.5%(1件)

「ポーランドの映画ポスター」展 12件(母集団72件)有効回答数12件

・良い75.0%(9件)・普通16.7%(2件)・悪い8.3%(1件)

「松竹創業110周年記念 松竹と映画」展 11件(母集団53件)有効回答数11件

・良い81.8%(9件)・普通18.2%(2件)・悪い0%(0件)

合計 65件(母集団381件)有効回答数63件

・良い77.8%(49件)・普通19.0%(12件)・悪い3.2%(2件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

成瀬巳喜男関連のシンポジウムは、出席予定の石井輝男監督が開催直前に逝去したために出席者が聞き手の他に3名となったが、これまで知られていなかった成瀬巳喜男監督のエピソードを参加者に提供することができ、定員の310名を超える観客が集まった。今回はシンポジウムの中で、フィルムセンターでの上映が初公開となる1本を含む2本の成瀬巳喜男関連の記録映画を上映した。

尾上松之助関連の講演会では、新たに映画上映との組み合わせを試み、弁士と伴奏付きの上映も行った。これにより鑑賞者の理解を深めることができたと考える。

また、昨年度に引き続いて展示企画に関連したギャラリートークを実施した。昨年度は計3回であったが、平成17年度は3倍の計9回を実施した。今回は研究員だけでなく外部の専門家や研究者を招いて展示資料の解説を行うことで、より幅の広い専門的な知識を参加者に提供することができた。

【見直し又は改善を要する点】

シンポジウム時に、当初用意していた必要な関係者席の数を上回る関係者の来館があったため、入館者数の把握に時間を要した。今後は関係者の人数を的確に把握して調整するとともに、一般観覧者への配慮を徹底したい。

(3) - 1 研修の取組

中期計画

- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員(キュレーター)の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。

実績

1. 映画製作専門家養成講座

実績なし

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

実績がないため該当なし。

【見直し又は改善を要する点】

映画製作専門家養成講座は、大学等で同様の講座が開設されてきていることを受けて見直しを行い、実施しなかった。ただし、今後も将来の映画製作を担う学生や若手の映画製作関係者が良質な上映プリントで過去の作品を鑑賞するための環境整備は重要であり、引き続き特別映写観覧による大学・専門学校等外部機関との連携を図っていく。

また、一般にはフィルム・アーカイブの役割が必ずしも浸透していないことから、フィルム・アーカイブとしてのフィルムセンターの役割として、映画保存の専門家を養成する事業について新たに検討を開始したい。

(3) - 2 大学等との連携

実績

1. 博物館実習生の受入れ

受入期間 平成17年7月27日～平成17年7月31日(5日間)

開催場所 フィルムセンター及び相模原分館

参加者数 12人(昨年度実績16人)

担当した研究員数 6人

事業内容 講義・館内見学・映画資料整理

2. インターンシップ制度の実施(平成17年度からの新規事業)

研修期間 平成17年10月1日～平成17年12月28日

開催場所 フィルムセンター

参加者数 1人

担当した研究員数 2人

事業内容 映画文化に関心を持つ人材の専門的知識及び技術の向上を図り、主体的な職業選択能力や職業意識、勤労観を育てることを目的として、フィルムセンターにおける実務研修を実施した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成17年度は9大学より12名の実習生を受入れ、フィルム・アーカイブの理念、フィルムセンターの歴史と運営、3つの係(映画係、企画・普及係、情報・資料係)の役割、相模原分館におけるフィルム保存の実際、フィルムの種類とその取り扱い方法などを講義するとともに、実習としてフィルム缶のラベル作成、スチル写真とポスターの整理・データベース入力作業、上映企画の広報資料の整理に当たらせた。網羅的な映画の収集・保存・復元を行うフィルム・アーカイブ活動の重要性を講義するとともに、具体的な資料整理や入力作業などの実務体験も充実させたことにより、効果的な実習になった。

平成17年度は、以前から要望のあったインターンシップ制度を、主に映画映像を学ぶ大学院生を対象として年度途中から新規に整備し、カリフォルニア大学ロサンゼルス校から1名を受入れて実施することができた。

【見直し又は改善を要する点】

インターンシップ制度については、受入れ体制の整備等を行い、年間を通して計画的に実施していきたい。

(3) - 3 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

1. 登録人数

なし

2. 活動内容

なし

3. 今後の取り組み

7階展示室の映画部門専有化に伴う映画の歴史等の解説や、「こども映画館」における上映前トークなどを行うボランティアの導入について検討した。

自己点検評価

東京国立近代美術館本館及び工芸館での活動状況を踏まえて、7階展示室での解説や「こども映画館」での解説ボランティア等導入の検討を行っていきたくと考えているが、フィルムセンターは、大衆芸術である映画(娯楽)を取り扱っているため、東京国立近代美術館本館及び工芸館と異なり、アート・ミュージアムにおけるボランティアのスタイルとして一般的になっている作品解説ボランティアは馴染み難く、この点を考慮に入れた導入について検討を行っていきたく。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

1. 企業等との連携

共催上映の実施

- ・「ポーランド映画、昨日と今日」(ポーランド商工会議所EXPO事務局)
- ・「第6回東京フィルメックス 特集上映 生誕百年特集 映画監督 中川信夫 ～地獄のアルチザン～」(特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会)

「こども映画館」を実施するに当たり、昨年に引き続いて企業(株式会社IMAGICA)の協力により記念品の提供を行った。

「松竹と映画」展の展示映像の著作権者として、映画製作者からの協力を受けた。

「特別企画 成瀬巳喜男シンポジウム」を実施するに当たり、製作プロダクション(株式会社アルボス、玉井正夫を記録する会)の協力により成瀬巳喜男関連ドキュメンタリー作品の上映が可能となった。

委託販売

上映、展示の内容に応じ、書籍及びDVDなどについて、出版社などから委託を受けて販売を行った。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

平成17年度は、上映企画の実施に関して、引き続き外部との連携を積極的に模索・実行した。愛知万博でポーランド館を運営するポーランド商工会議所との共催となった「ポーランド映画、昨日と今日」は、年度計画にない企画だったが、万博という貴重な機会を捉えて迅速な対応で実現にこぎつけた企画であった。また、映画祭「東京フィルメックス」との部分共催となった中川信夫監督特集は、フィルムセンターと共催相手のパートナーシップを強化した。さらに、「特別企画 成瀬巳喜男シンポジウム」に当たっては、完成したばかりの記録映画『成瀬巳喜男 記憶の現場』及び『カメラマン 玉井正夫』の上映が実現できた。フィルムセンターの豊富な映画コレクションと優れた上映施設、企画運営のノウハウを外部にアピールしつつ、今後も各方面との共同開催を探っていきたい。このことは展示・講演会・シンポジウムについても同様である。

【見直し又は改善を要する点】

事業運営、広報、サービスを充実するため、企画上映及び展覧会への新聞社、企業、メセナ財団の協力や支援を得る方策を検討したい。

5. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的の実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等 (1)-1

障害者トイレ 1個所(1階1個所)

障害者エレベータ 2基

段差解消(スロープ) 1個所(正面玄関)

貸出用車椅子 2台(1階)

自動ドア 1箇所(正面玄関)

大ホールの男子・女子トイレの階段壁面手摺り

展示室内の映像モニター鑑賞用椅子

「映画の広場」上映待ち来館者用椅子

半自動除細動器(AED) 1台

2. 観覧環境の充実 (1)-2、(1)-4

7階展示室での映像モニターをDVD・デジタル映像に更新し、展示環境を改良整備した。

3. 夜間開館等の実施状況 (1)-3

(1) 上映開始時間の変更等

引き続き、平日夜の回の上映開始時間を30分繰り下げ、午後7時からとした。

(2) 入場料金の取組み

小・中学生の入場料の低廉化の一環として、展示室の小・中学生料金を無料とした。

展示室の学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金を下げることにより、料金を低廉化。

65歳以上の入館者に対する観覧料金は学生料金を適用。

上映会観覧当日に限り、展示室観覧料は団体料金を適用。

(3) その他の入館者サービス

館内での案内情報の充実

ア. 1階受付カウンターで館内の案内情報を提供。

イ. 1階、2階、4階及び7階の来館者が利用できるフロアにパンフレット台を設置し、上映プログラムや展覧会等のチラシを配布。

休憩スペースの充実

ア. 1階エントランスロビーへ移動した「映画の広場」を来館者の休憩場所としても活用した。

イ. フィルムセンターの上映・展示等の企画情報を提供するため、7階から1階「映画の広場」に大型ディスプレイを移設した。(運用は来年度から実施。)

4. アンケート調査 (1)-3

調査期間 上映会・展覧会・講演会等アンケート調査の際に実施。

調査方法 入館者にアンケート用紙を配布し、記入後回収。

(1) 上映会

アンケート回収数 2,190件(有効回答数1,991件)

アンケート結果 ・良い90.4%(1,800件)・普通7.7%(154件)・悪い1.9%(37件)

(2) 展覧会 特別展示を含む

アンケート回収数 244件(母集団15,186件)有効回答数238件

アンケート結果 ・良い78.6%(187件)・普通19.3%(46件)・悪い2.1%(5件)

(3) 講演会等・ギャラリートーク

アンケート回収数 228件(母集団1,125件)有効回答数201件

アンケート結果 ・良い82.6%(166件)・普通13.9%(28件)・悪い3.5%(7件)

5. 一般入館者等の要望の反映 (2)

開場前に並んでいる入館者の便宜を図るため、2階エレベータホールへ18席の椅子及び上映会場入口へ通じる階段部の踊り場へ椅子を設置。

6. レストラン・ミュージアムショップの充実 (3)

フィルムセンターでは、施設の面からミュージアムショップ等のスペース確保が難しいが、各会場入口の受付において、企画上映・展示にあわせた書籍類・DVD等のグッズの委託販売を行い、来館者へのサービスに努めた。

平成15年秋のレストラン撤退以降、飲食物の販売を行っていなかったが、平成17年度から1階「映画の広場」に自動販売機(飲料)を設置し廉価で提供することで、来館者へのサービスに努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

これまで展示室及び企画上映の会場では、フィルムセンターの刊行物のみを販売していたが、引き続き一般書店では取扱われていない映画関連図書に加え、上映・展示に則した書籍及びDVD等グッズの委託販売を行い、また、1階「映画の広場」に自動販売機(飲料)を設置し廉価で販売したことで好評を得た。

「NFC所蔵外国映画選集 ドイツ・オーストリア映画名作選」の上映にあわせて、ドイツ大使館の協力を得て鑑賞者(上映5回の鑑賞者)に記念品を進呈して来館者へのサービスに努めた。

今後ともアンケート調査等により、来館者のニーズを把握・分析し、上映開始時間の見直しや展示室、図書室その他の利用者に対するきめ細かいサービスを実施していきたい。

【見直し又は改善を要する点】

フィルムセンターは、リピーターが多いという特性から、回数券の導入や、割引を受けられる会員制度についての要望が寄せられている。これについても、観覧者サービスの観点と収入のバランスを考慮しつつ、今後検討していきたい。

開かれた施設を目指し、できるだけ多くの来館者が満足できる入館者サービスを実施するには、現状の施設、人員や経費の面で困難が伴うが、今後も入館者の要請に応えられるようきめ細かいサービスの確保、提供に努めていく。